

「学生による授業評価」に基づく
授業報告書

2021 年度

聖心女子大学

目次

第1章 学生による授業評価の概要	1
第2章 専任教員による授業報告書	17
第3章 学科・専攻による授業報告書	
英語文化コミュニケーション学科	57
日本語日本文学科	60
史学科	62
人間関係学科	64
国際交流学科	66
哲学科	67
教育学科 [教育学専攻・初等教育学専攻]	68
心理学科	74
第4章 聖心女子大学グッドティーチャー賞の推薦	76
参考資料 2021年度 専任教員授業報告書（回答フォーム）	

第1章 学生による授業評価の概要

1. 実施対象科目

2021年度の学生による授業評価は、これまでのマークシート方式から Google フォームを用いたオンライン回答形式に変更した。地球温暖化対策としてカーボンニュートラルが強く推奨されるようになった時代背景とともに、2020年度、コロナ禍においてオンラインツールが広く浸透したことを受けての方針変更である。

2021年度に授業評価が行われたのは241科目であった。内訳は専任教員による授業が93科目（前期46科目、後期33科目、通年14科目）で、非常勤による授業が148科目（前期76科目、後期59科目、通年13科目）であった。学生の有効回答者数は延べ6273名となるが、実施科目のうち、教員の指示なく回答したと思われる（回答者が1名など）科目については集計の対象外とした。

コロナ禍前の2019年度は全体で475科目であったが、2021年度は実施授業数が半減したことになる。専任教員による授業評価は2019年度の78科目から93科目と増加したのに対し、非常勤の授業評価が397件から148件へと大きく減少したのが響いている。その理由としてオンライン授業が継続された中、非常勤講師に授業評価の依頼が十分に伝わっていなかったことに加え、オンラインを用いた授業評価の手順や、それを学生に周知する方法に馴れていなかったためと考えられる。この点は2022年度に向けての課題としたい。

2. 実施方法

調査は Google フォームで実施した。学生は教員の指示に従い、各自 Google にアクセスして回答する。回答は無記名で、時間は10分～15分程度であった。

（1）専任教員実施方法

実施予定の科目を選択式・自由記述式のどちらで実施するかを学生に指示し、回答率向上のためできるだけ授業時間内に回答するよう周知する。授業時間内に実施が難しい場合は「明日の17時まで」など期日を指定して対応する。いずれの方式も教務課で集計を行い、選択方式で実施の場合はデータと自由記述部分、自由記述方式で実施の場合は記述部分を教務課より受け取り、自身で管理し年度末に授業報告書を作成する。リアクションペーパー・教員個人で作成したアンケートなどで実施の場合は、教員自身で準備をする。

尚、報告書の提出については2科目以上実施科目がある場合は、1科目の提出でも構わないことになっている。尚、本年度の報告書提出数は86科目であったが、2科目は旧書式のため有効報告書数は84科目となった。

(2) 非常勤講師実施方法

実施予定科目を選択式で実施（※非常勤は選択式のみ）することを学生に指示し、回答率向上のためできるだけ授業時間内に回答するよう周知する。授業時間内に実施が難しい場合は「明日の17時まで」など期日を指定して対応する。教務課で集計を行い、調査結果データ及び自由記述部分は後日郵送する。

3. 評価内容

質問内容は以下の通りである。

- Q1. この授業への出席率はどのくらいでしたか。
- Q2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。（本やインターネットで調べるなども含む）
- Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。
- Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。
- Q5. シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。
- Q6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。
- Q7. 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った。
- Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。
- Q9. 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった。

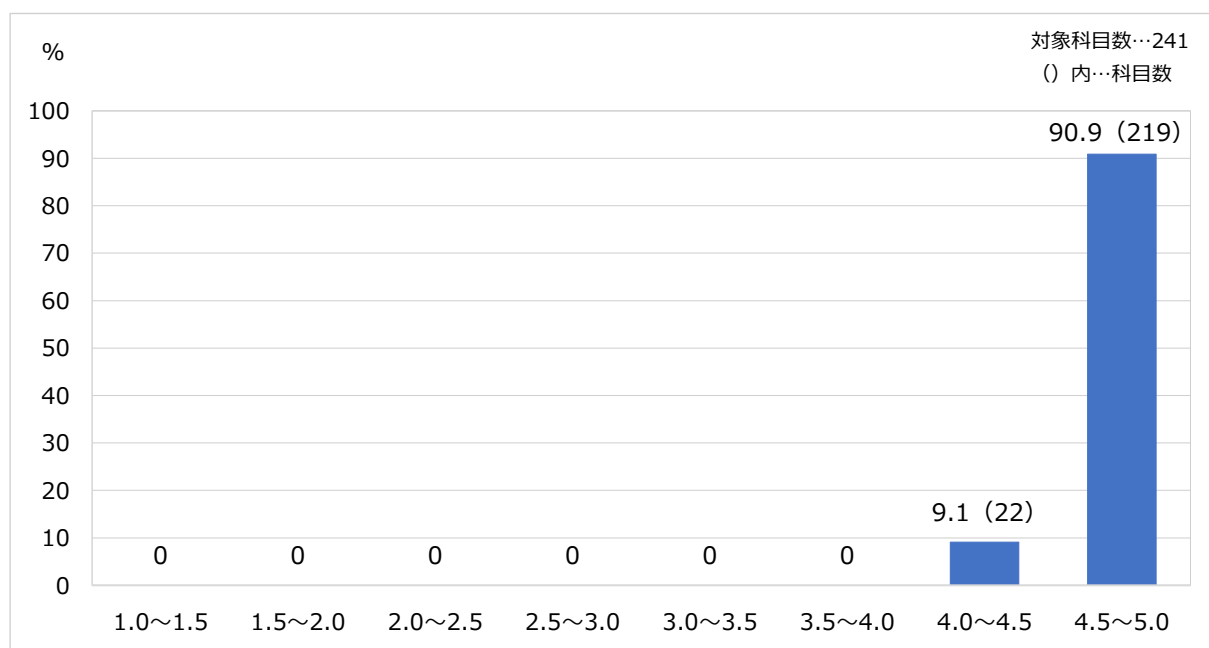
Q1 については、「すべて出席した、1～2 度欠席したがほとんど出席した、3分の 2 程度出席した、3分の 1 程度出席した、ほとんど出席しなかった」の 5 段階で、Q2 については「2 時間以上、1～2 時間、30 分～1 時間、30 分以下、0 分」の 5 段階で回答を求めた。その他の質問については、「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの 5 段階で評価してもらった。

4. 各設問への回答内容

各授業について学生の回答の平均値を算出し、その平均値の分布を以下の図で示している。以下、順に見ていくが、2019 年度の結果に比べると、学生の出席率が高く、予習復習時間が長く、また授業に関する各評価についても学生から好評価を受けて増えている。コロナの影響でオンライン授業が増えたこと、それによって教員の授業への意識や技能が高まったこと、シラバスへの記載がより詳細になったことなども考えられるが、特に今回、授業評価を受けた非常勤の授業数が減少していることの影響も考えられる。今後、授業評価を実施する授業数を増やす中で、この傾向を注視していく必要がある。

(1) この授業への出席率ほどのくらいでしたか

出席の回答の平均が 4.5 以上、すなわち学生の平均が「1~2 回の欠席」と「すべて出席した」の間である授業が全授業の 9 割を占めていた。2019 年度では 39%であったのに比べると大幅な伸びが認められる。

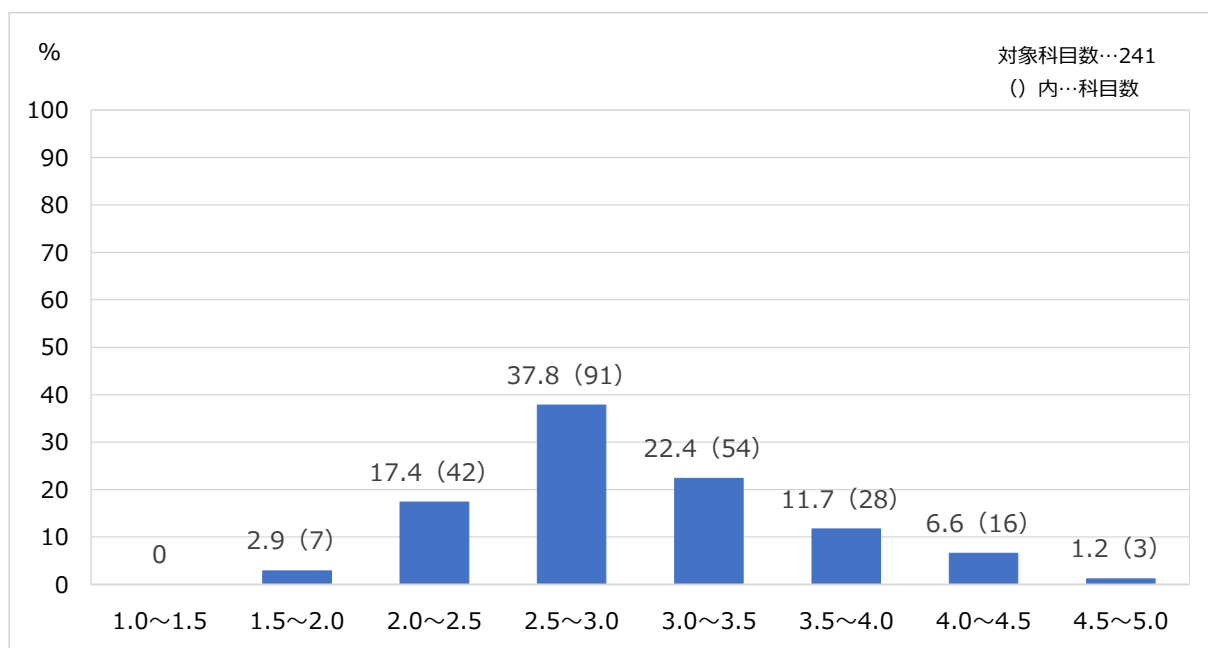


Q1. この授業への出席率ほどのくらいでしたか。

- | | | |
|---------------|-----------------------|---------------|
| 5. すべて出席した | 4. 1~2 度欠席したがほとんど出席した | 3. 3分の2程度出席した |
| 2. 3分の1程度出席した | 1. ほとんど出席しなかった | |

(2) この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなども含む)

回答の状況から学生が「30分以下」から「30分～1時間」程度の予習、復習をした授業が中心となる分布であったが、2019年度に比べると予習復習時間が多かった授業が全体に増加している様子がうかがえる。オンライン授業の導入等に伴い、授業後の課題を求める授業が増加したためと考えられる。



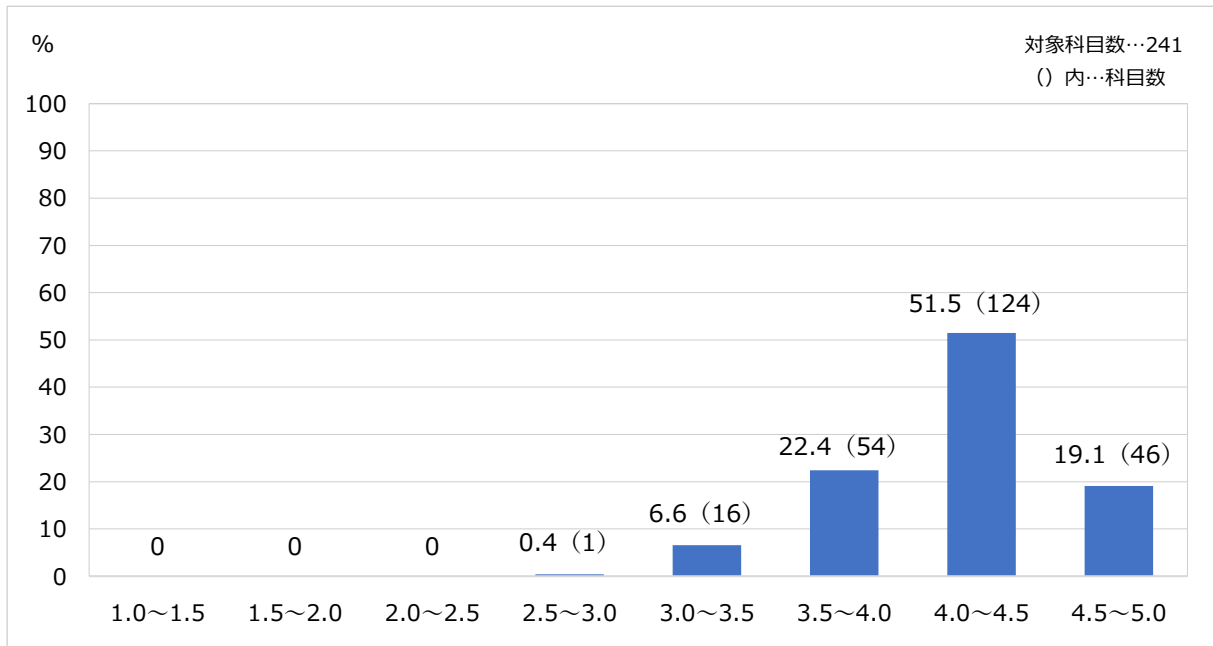
Q2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなども含む)

5. 週2時間以上 4. 週1～2時間 3. 週30分～1時間 2. 週30分以下

1. 週0分

(3) 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった

「受講前からこの授業の内容に興味・関心があった」という項目に当該授業がどの程度あてはまるかを尋ね、受講前の授業への学生の関心度とした。平均が 4.0 以上、すなわち、「ある程度あてはまる」から「よくあてはまる」と評価された授業が全体の 7 割強と多かった。2019 年度は 6 割程度であり、学生に興味・関心がある授業が増加している。

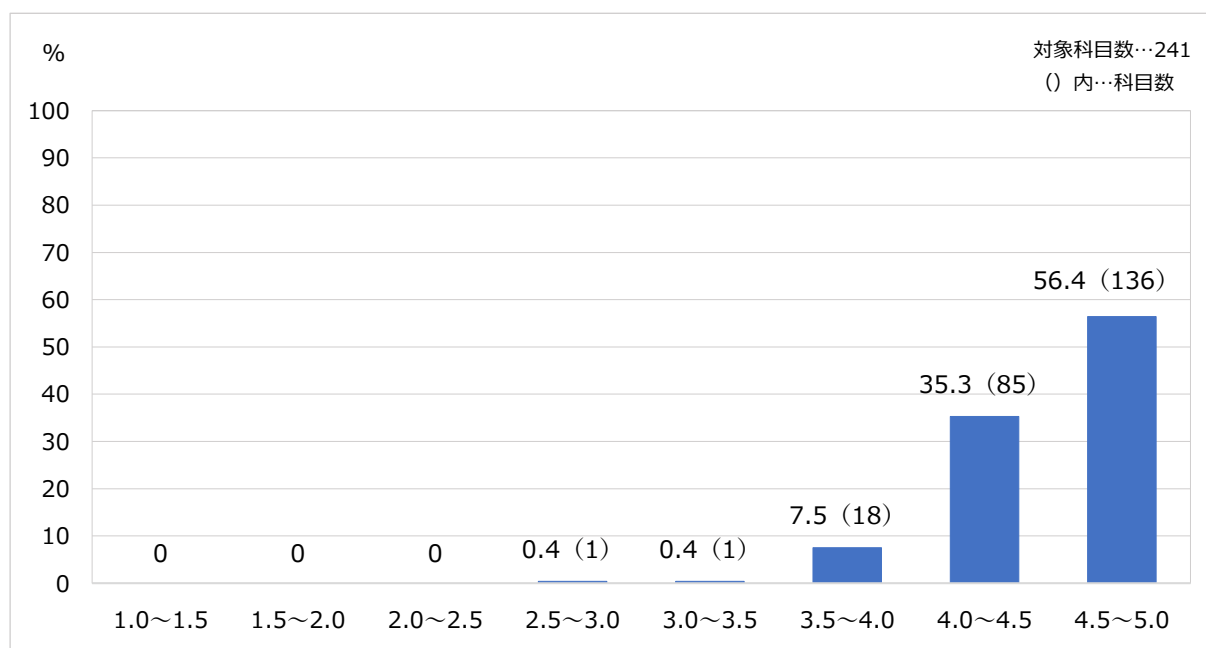


Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない
1. まったくあてはまらない

(4) 総合的にみて、この授業に満足した。

「総合的にみて、この授業に満足した」との項目に当てはまる程度を尋ね、授業への満足度とした。学生の評定の平均が4.0以上、すなわち、「よくあてはまる」と「ある程度あてはまる」の間に学生の平均がある授業が9割を超えて多かった。2019年度と比較しても、特に満足度の平均が「4.5～5」の授業が4割弱から2021年度は6割弱に伸びているなど満足度は高まっている。

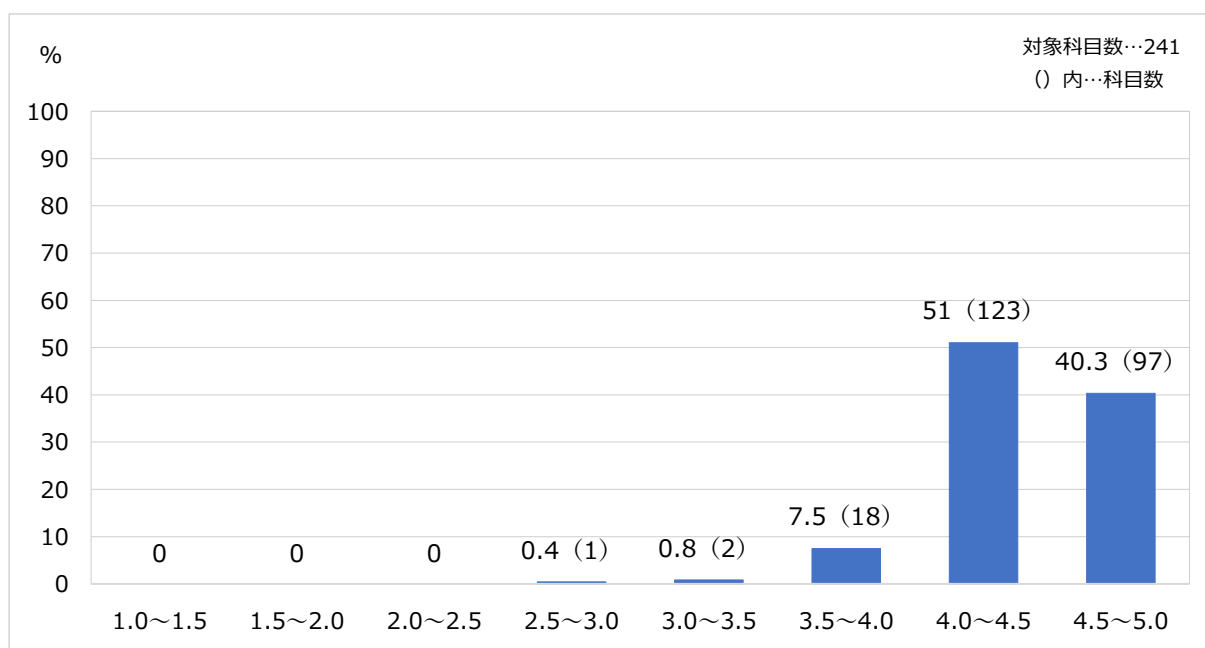


Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない
1. まったくあてはまらない

(5) シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

「シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った」の項目への当てはまる程度を尋ね、シラバスの記載内容への評価とした。学生の評価が、4.0 以上、つまり「ある程度当てはまる」以上と評価された授業が全体の 9 割強と多く、2019 年度の 8 割弱よりも高くなっている。

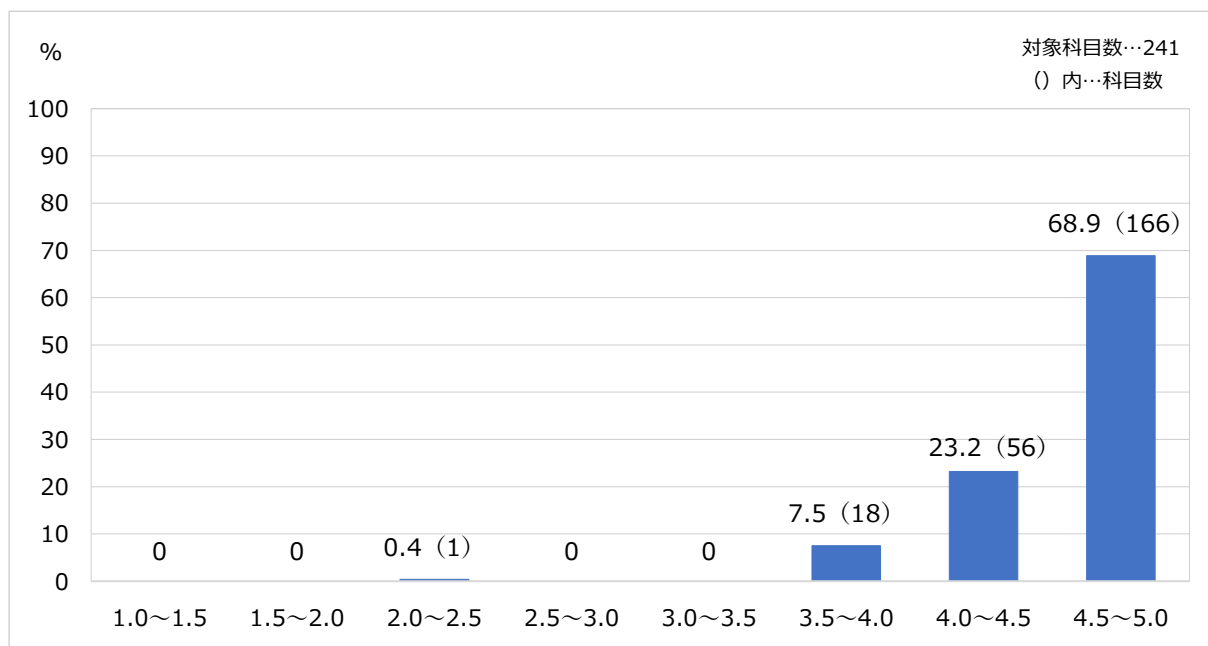


Q5. シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない
1. まったくあてはまらない

(6) 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった

「教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった」の項目への当てはまる程度を尋ね、教員の説明への評価とした。学生の平均の評価値が「4.5～5」の授業が全体の7割弱を占め、全体に評価の高い授業が多かった。2019年度はこの比率が5割であったことと比べると、大きな伸びを示している。

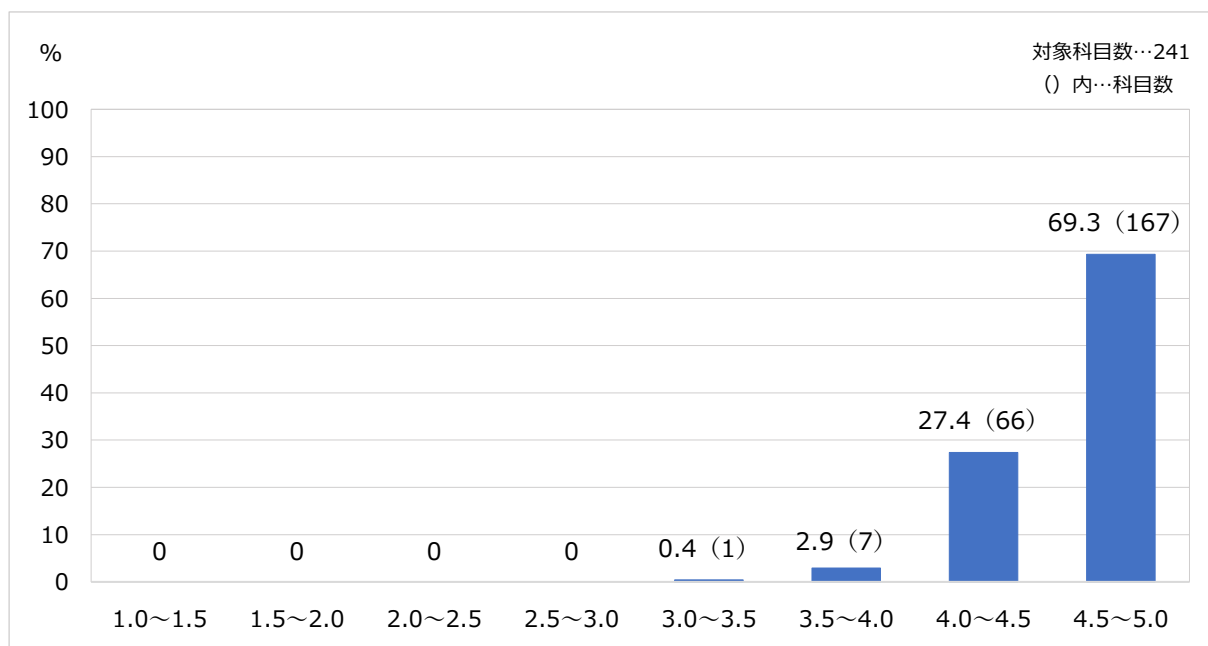


Q6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない
1. まったくあてはまらない

(7) 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った

「授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った」の項目にあてはまる程度を尋ねた。学生の平均値が 4.5 以上の授業が全体の 7 割と多かった。これも 2019 年度の 5 割から大きく高まっていた。

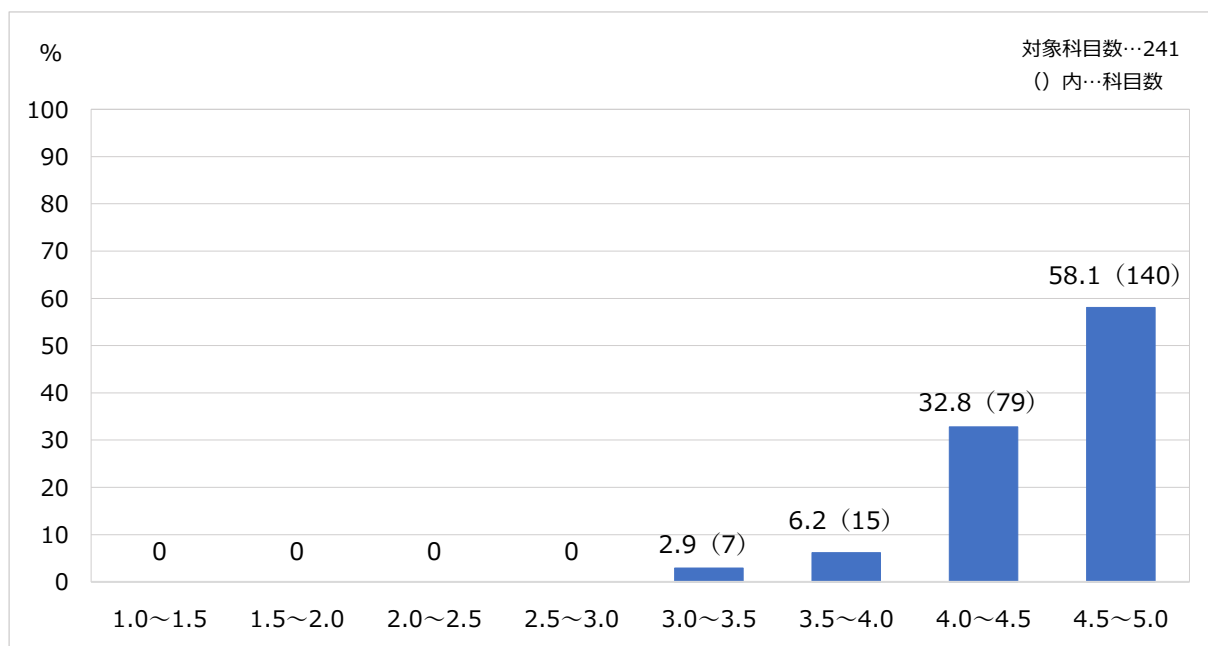


Q7. 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない
1. まったくあてはまらない

(8) 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった

「毎回の授業内容の分量や速度は適切だった」の項目に当てはまる程度を尋ねたところ、平均値が4.5以上、「ある程度当てはまる」から「当てはまる」と評価された授業が、全体の6割弱であった。2019年度では5割弱であったことから、この点についても評価が高まっている。

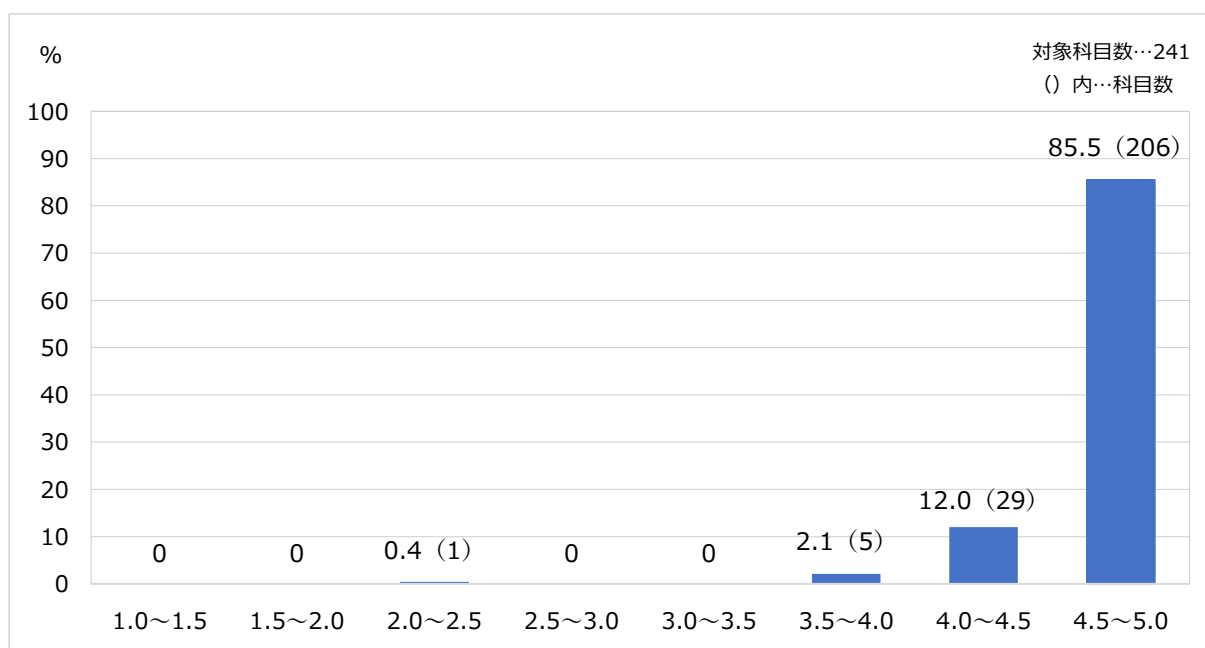


Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない
1. まったくあてはまらない

(9) 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった

「教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった」に当てはまる程度は平均評定値が 4.5 から 5 と高い授業が全体の 86%を占めて多かった。2019 年度では 64%であったことと比べると大きな伸びになっている。



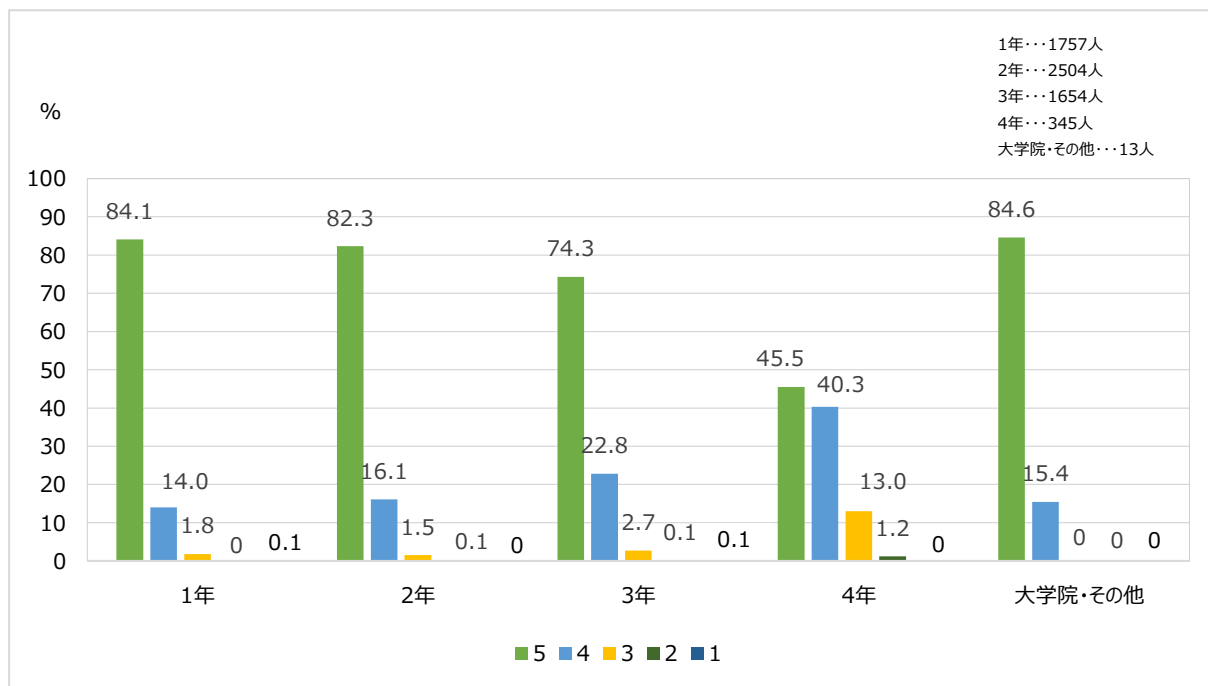
Q9. 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない

1. まったくあてはまらない

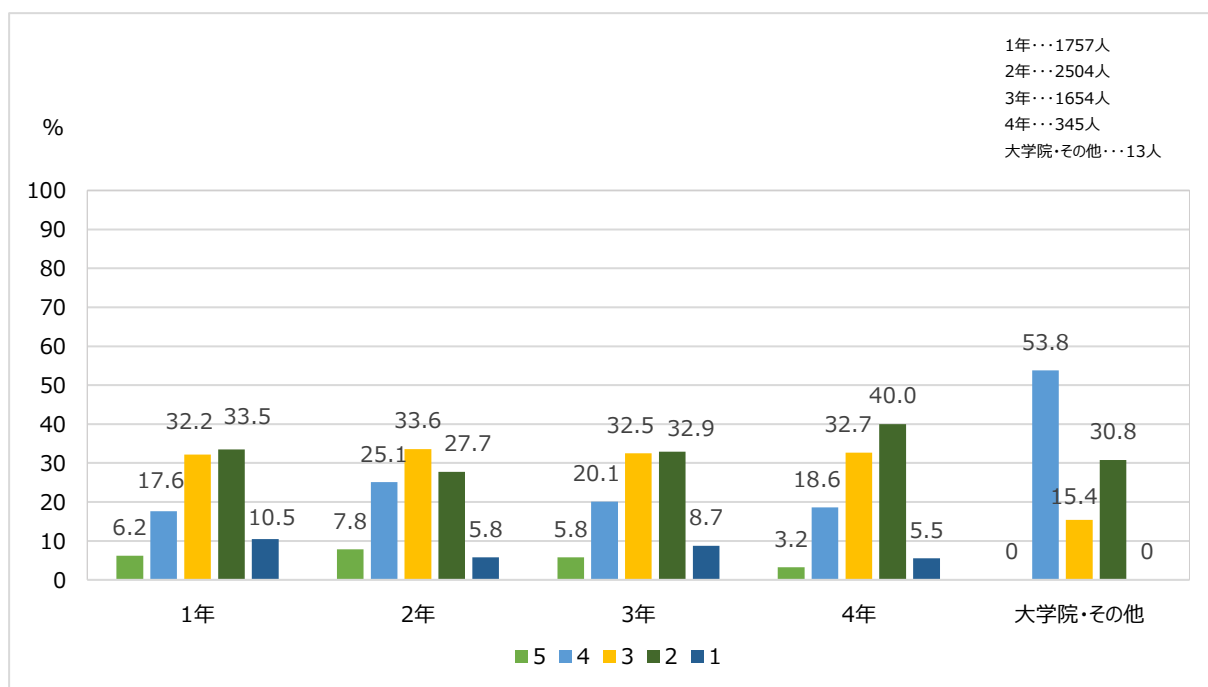
5. 学年別の選択肢平均回答比率

各設問に関して、学年別に評価得点の比率を比較した。全体に大きな差異はないが、授業への出席率については就職活動の影響からか、4年生において出席率が低い学生が多めであった。



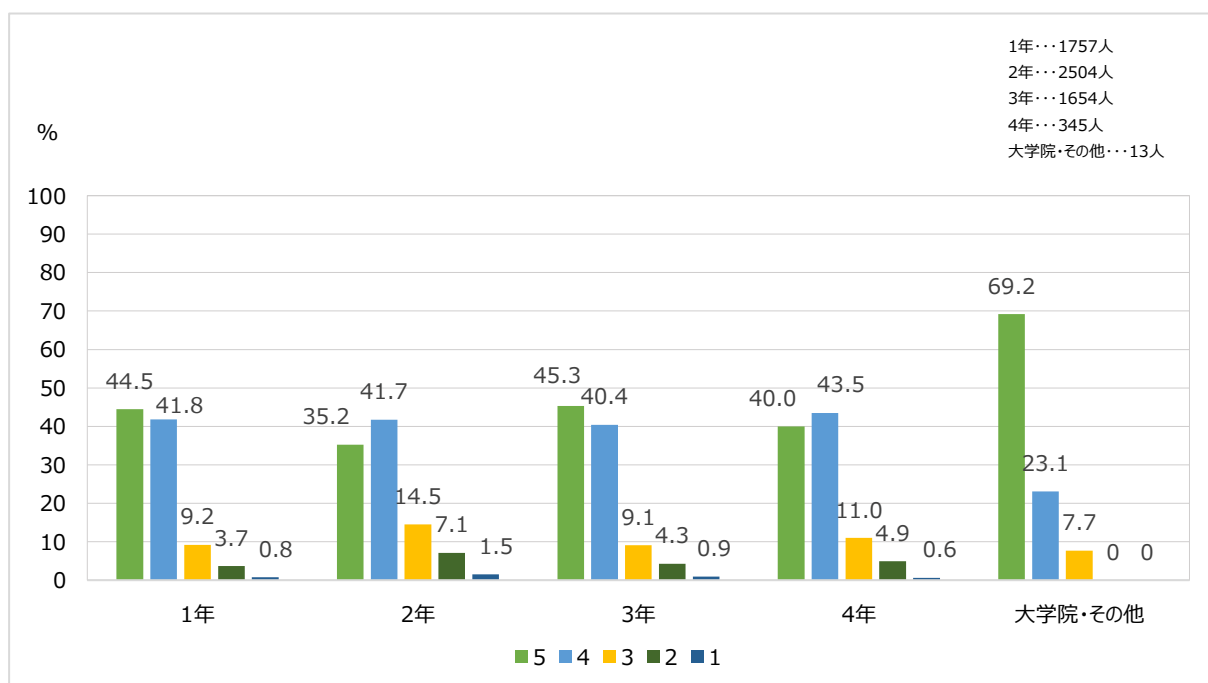
Q1. この授業への出席率はどのくらいでしたか。

- | | | |
|---------------|----------------------|---------------|
| 5. すべて出席した | 4. 1～2度欠席したがほとんど出席した | 3. 3分の2程度出席した |
| 2. 3分の1程度出席した | 1. ほとんど出席しなかった | |



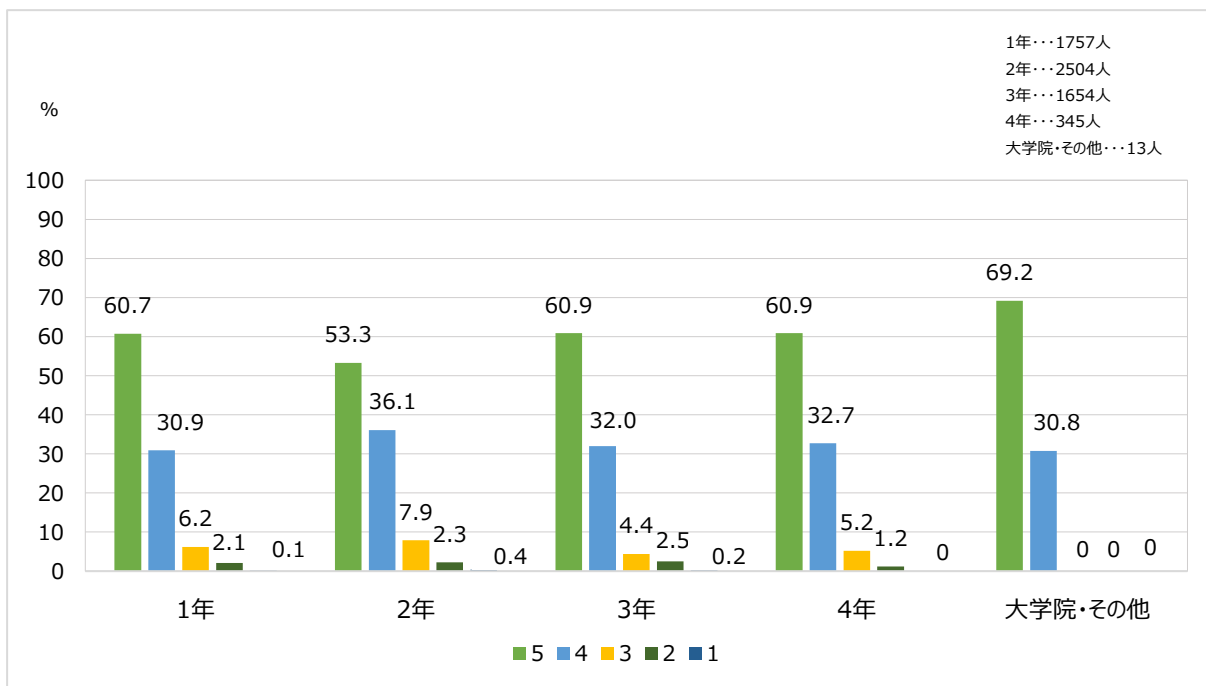
Q2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなども含む)

5. 週2時間以上 4. 週1～2時間 3. 週30分～1時間 2. 週30分以下
1. 週0分



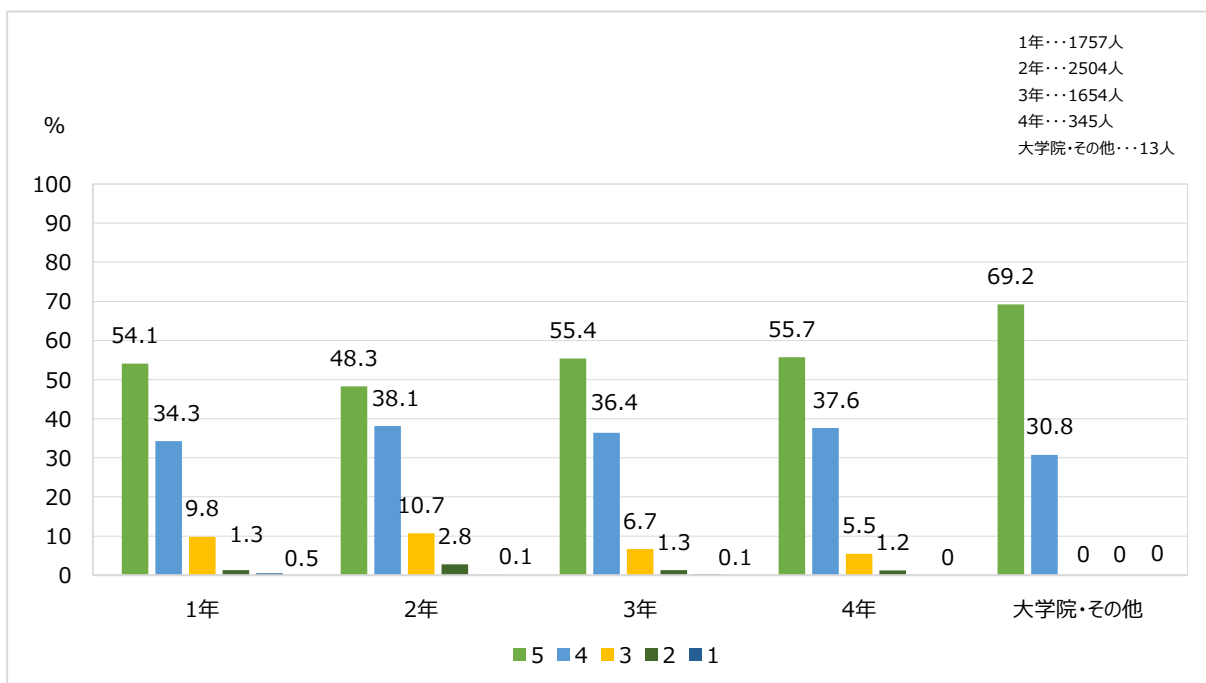
Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない
1. まったくあてはまらない



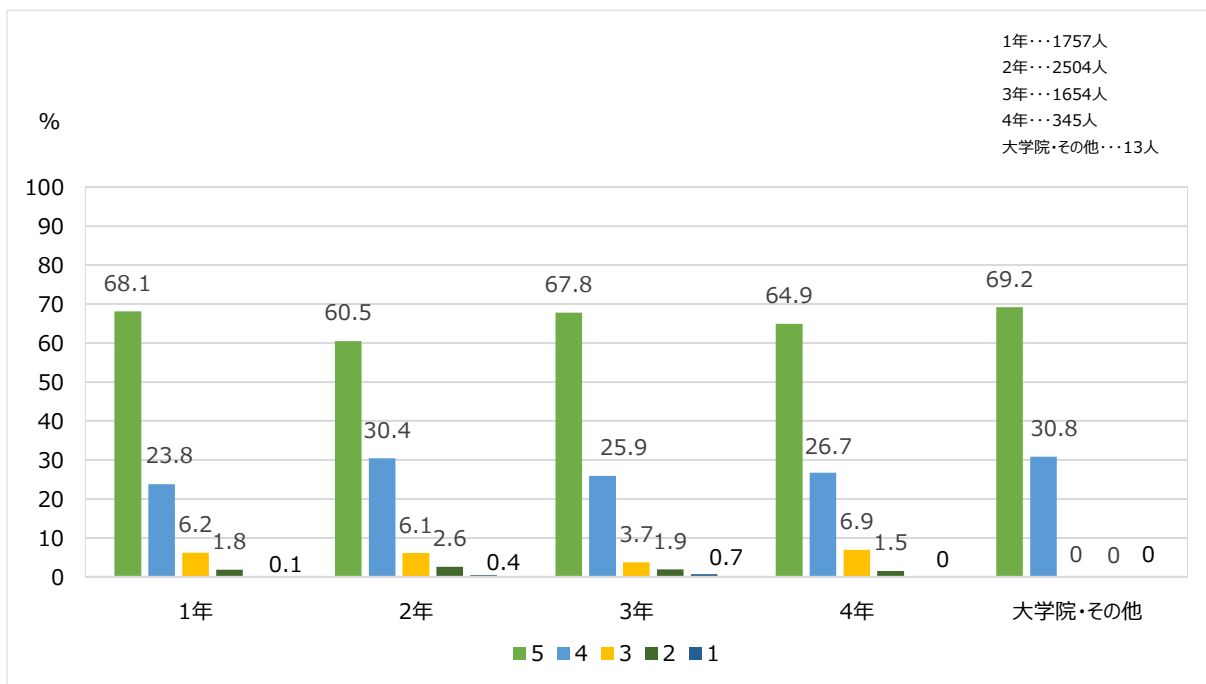
Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない
1. まったくあてはまらない



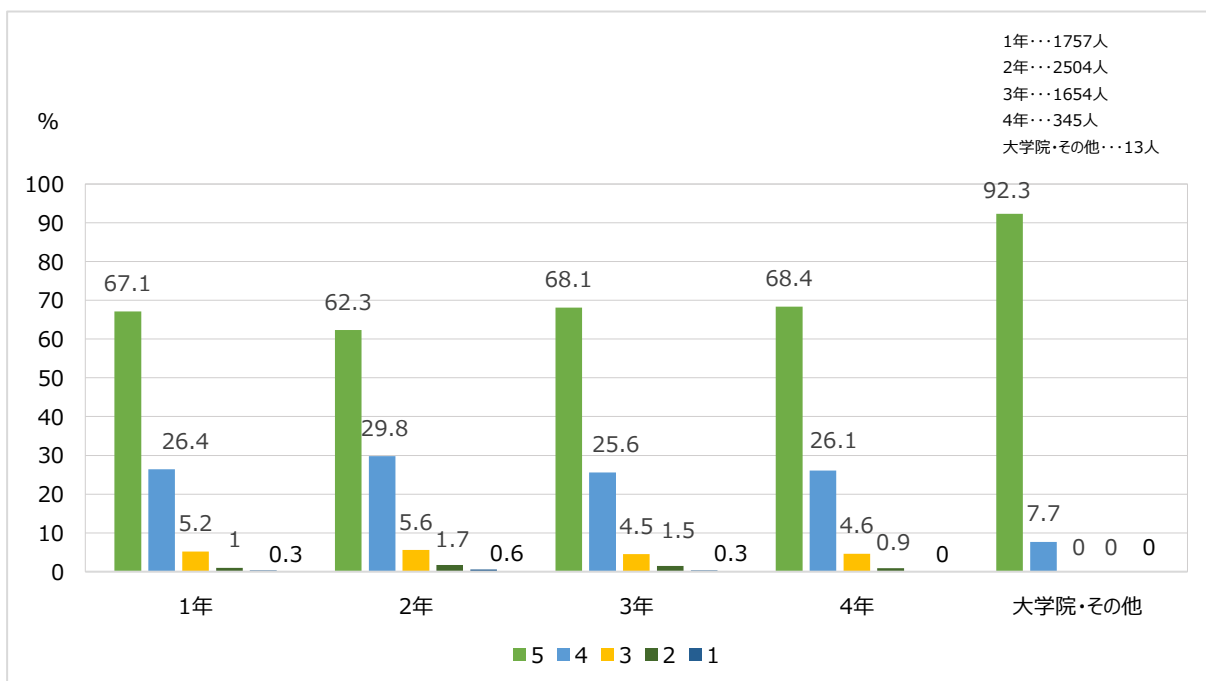
Q5. シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない
1. まったくあてはまらない



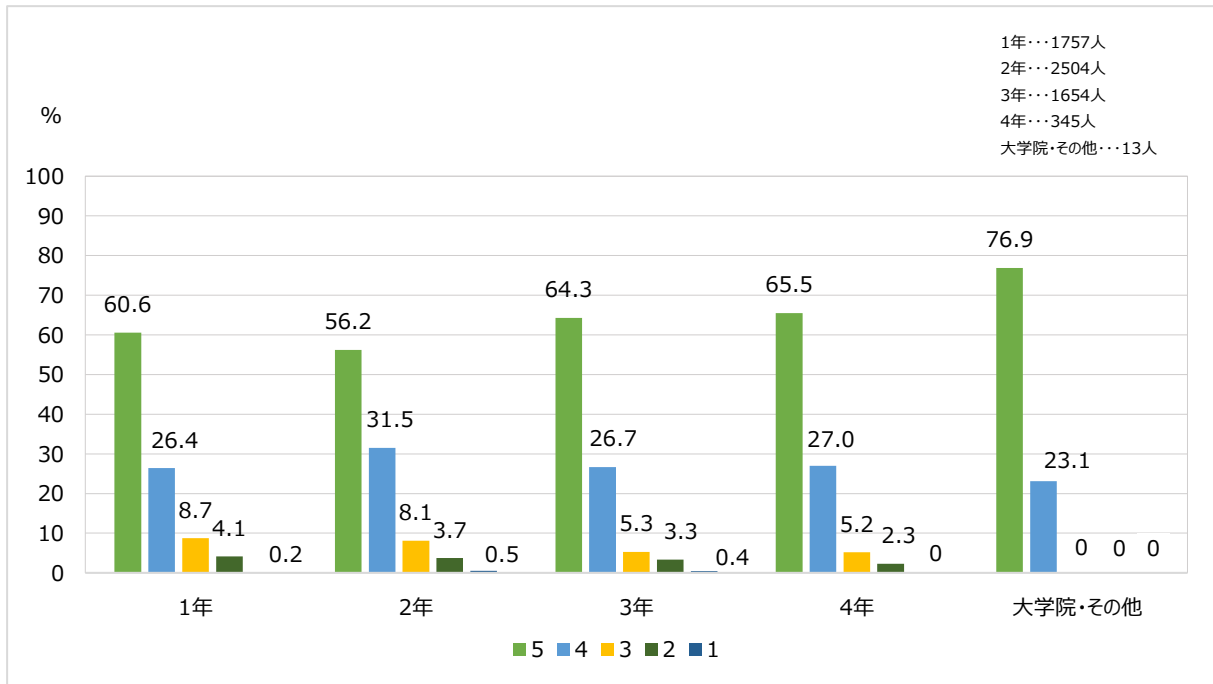
Q6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない
1. まったくあてはまらない



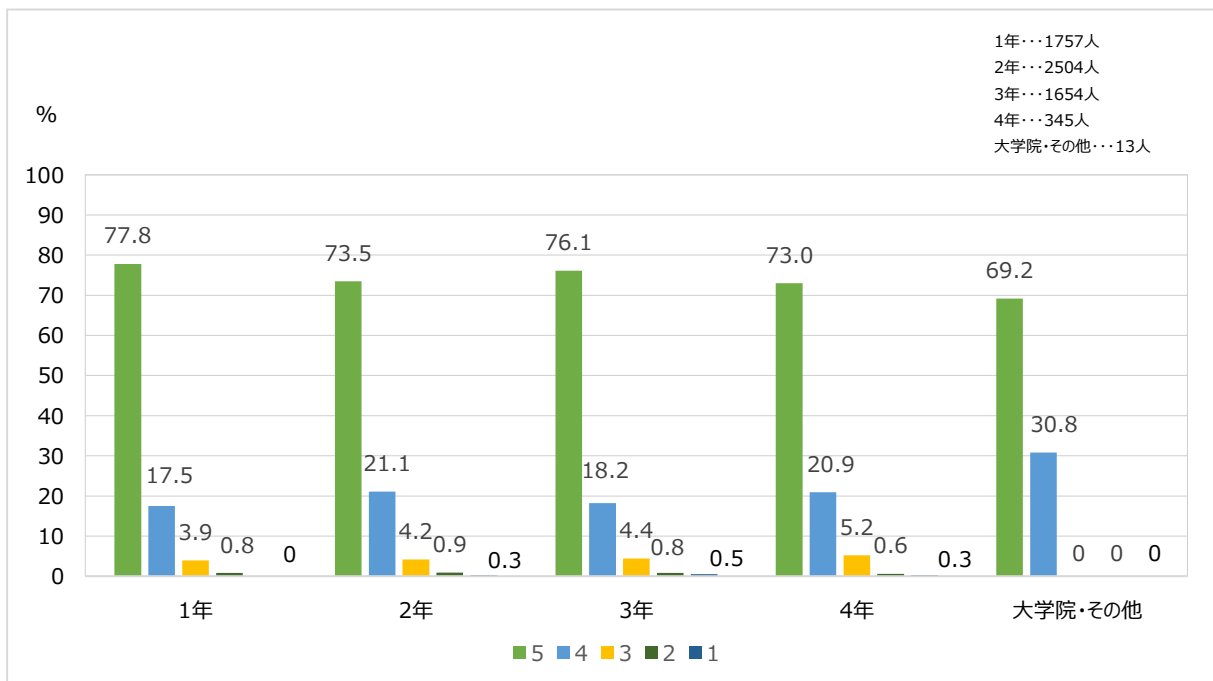
Q7. 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない
1. まったくあてはまらない



Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない
1. まったくあてはまらない



Q9. 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった。

5. よくあてはまる 4. ある程度あてはまる 3. どちらともいえない 2. あまりあてはまらない
1. まったくあてはまらない

第2章 専任教員による授業報告書

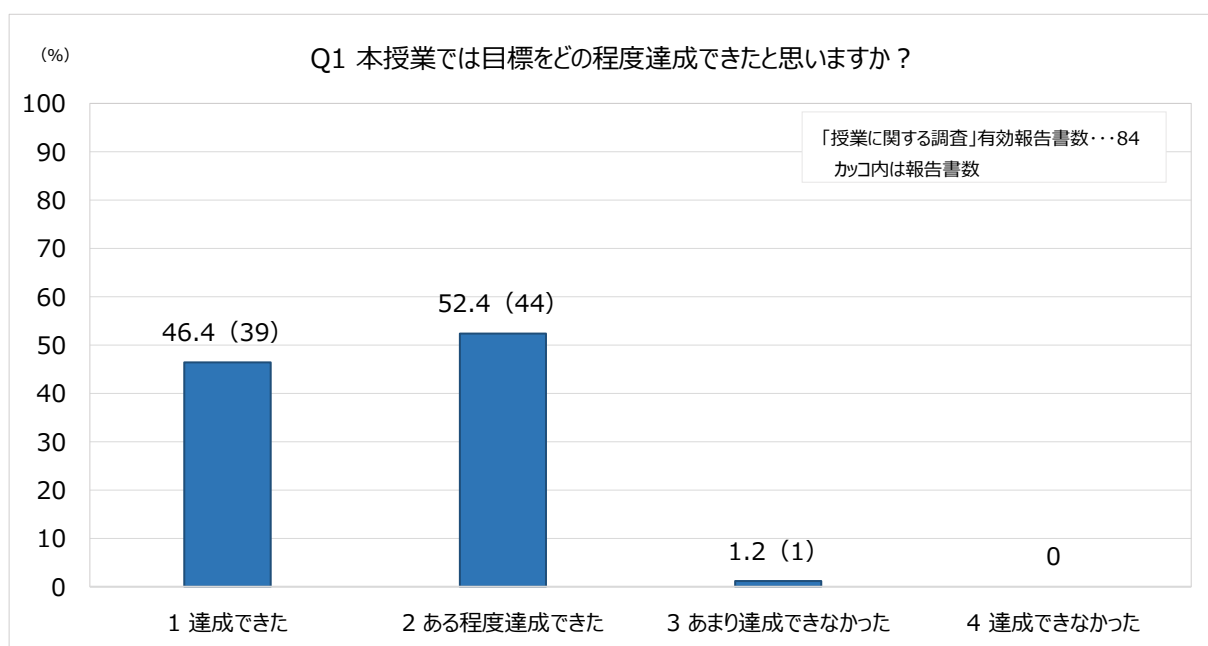
学生の授業評価を受け、各授業の担当教員は下記の点について、自らの授業を振り返るとともに、大学に対する提案を行うことで授業改善を図っている。

- ・ 授業目標の達成度認知
- ・ 授業の目標を達成する上で効果的な方法や工夫
- ・ 教室設備について（問題点等）
- ・ 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について
- ・ 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
- ・ 学科や大学全体として取り組むべきこと
- ・ 授業評価に関する意見、提言
- ・ その他

1. 授業報告のまとめ

(1) 授業の目標達成度

学生の授業評価を見た上で、専任教員に授業達成度を尋ねたところ、授業の半数弱で「達成できた」、残りの半数強で「ある程度達成できた」と回答されている。専任教員の認識としては一部に課題を残しながらも、授業は概ね目標を達成できたと考えられている。



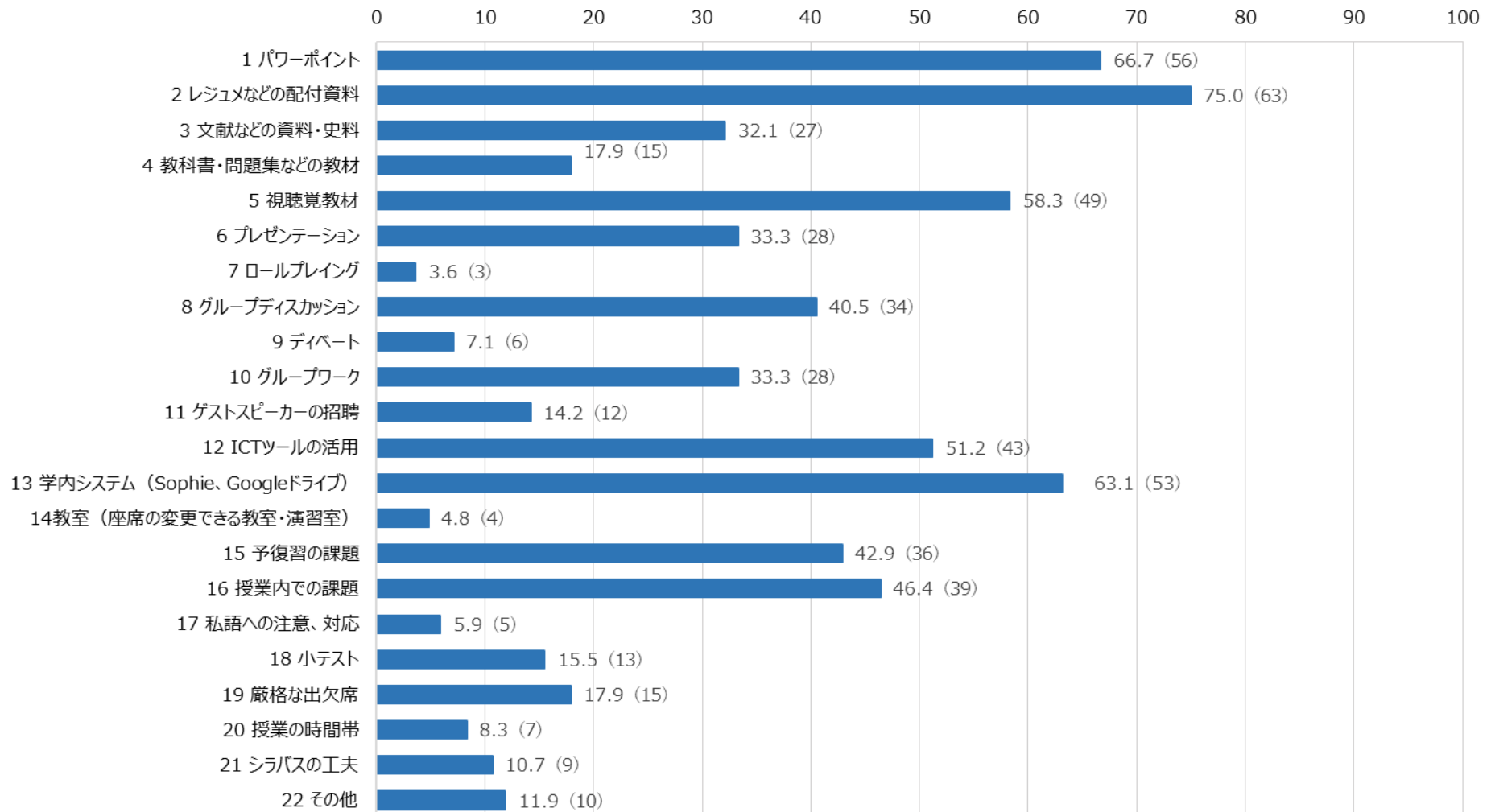
(2) 目標を達成する上で効果的だった方法や工夫

目標を達成する上で効果的だった工夫・方法としては、「レジュメなどの配付資料」が75%と最も多く、「パワーポイント」「学内システム」が6割台で続き、その他、「視聴覚教材」「ICT ツール」が5割台が続いている。また、「予習復習の課題」「授業内での課題」も4割と多めであった。特に、「Sophie や Google などの学内システム」や「ICT ツール」が効果的と回答した教員は、2019年度において2割～3割程度であったが、2021年度は5割～6割と大幅に増加している。コロナ禍においてオンライン授業に依存せざるを得なかったという事情はあるとしても、その活用の経験が授業の目標達成に有効であるという認識を持つに至ったことを示唆している。コロナ禍での経験は教員の授業方法の幅を広げる上で、FD的な効果を与えたと言えるかもしれない。

Q2. 目標を達成する上で効果的だった方法や工夫はどのようなものですか？（複数回答可）

「授業に関する調査」有効報告書数…84
 () 内回答数

(%)



22. その他

- ・実習形式
- ・Googlemeet でのリアルタイムの講義、復習用の録画動画の配信
- ・zoom を使用したリアルタイムの講義
- ・オンデマンド授業とリアルタイムの質問回の併用、提出物期限を知らせるリマインドメールの作成
- ・オンライン講義の録画
- ・授業のリズム
- ・リアルタイム型とオンデマンド型を組み合わせたオンライン授業。課題を提示して解答を提出させるオンデマンド方式に加え、課題に取り組む前の解説や、前の課題のフィードバックをリアルタイム方式で行う。ブレイクアウト機能を用いた受講生間のグループディスカッションも実施した。この方法が授業アンケートにおいて、課題にじっくり取り組むことができる、授業が理解しやすい、などと好評だった。
- ・リアルタイム型授業とオンデマンド型課題を組み合わせる。学生の理解度、提出課題の達成度が従来の対面授業より高まった。学生にも受講しやすいと好評だった。
- ・授業ノートの作成を推奨した
- ・授業の録画をアップすること

(3) 各教員からのコメント

教室設備について（問題点等）、教員個人が取り組むべきこと、学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について、学科や大学全体として取り組むべきこと、授業評価に関する意見、提言、その他の各項目については自由記述形式で回答を求めた。

以降はこれらの項目ごとに、各報告をまとめている。教員名、授業名は伏せているが、原則、プライベートな情報以外は原文のままを掲載している。

①教室設備について

教室番号	Q3. 教室設備について（問題点等）
不明	後期は模擬授業体の授業のため、黒板とスライドの両方が使える教室を使用する必要があり、教室変更を行なったが、移動した教室のプロジェクターが壊れていたり、使いづらかったりして機器に対応するのに時間が取られてしまったことがあった。
Building 1, Media Room E	Some students complained that the room was cold
メディア F ルーム	ブルーレイディスク再生システムが複雑で利用しにくいので、改善を検討してほしい。
331	PC の USB ポートの不具合、空調の音をスピーカフォンが拾いオンライン参加学生から「雑音で聞こえにくい」と苦情が出た。（両方の件は情報企画推進課に報告・対応済み）
213	オンライン対応用のカメラについて、ズーム機能などは教員にも調整可能にしたいと思っています
zoom	学生が Google フォームで課題を送信したのに送られていない（その場合は回答のコピーが手元に返らない） といったトラブルがある
オンライン	オンライン授業で、自宅の WI-FI が不調なケースがあった
221	後期にプロジェクターが不具合であったが、関係者に伝えても、なかなか直らず、修理時間が非常にかかりました。同じ教室を使用した教員も困っていたそうです。ハイブリッド授業では、必要不可欠な機材であるため、速やかな対応が望ましいと思います。また、教室にあるカメラを使用した際、遠隔で受講した学生は、画像数の低さのため黒板に書いた字が読めなかったため、板書の代わりに、コンピューターの書き込みに切り替えました
214	ワイヤレスマイクの電池切れ、マイクスタンドの固定部分の緩み

教室番号	Q3. 教室設備について (問題点等)
219	窓のすぐ下に何らかの巨大なファンがあるらしく、定期的にそれが作動して大変うるさかった。換気のために窓を開けている関係で音を防ぎようもなく、学生も少々迷惑がっていた。
保育ワークショップ	7月頃からエアコンが故障していたため、途中から別の教室を使用 → 報告、修理済
42	設置プロジェクターが古くなり、輝度と解像度が圧倒的に悪い。また、ハイブリッド授業を行うための環境が全く整備できていない。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

Writing の授業はきめ細やかな feedback が欠かせない。毎回できるだけ丁寧に学生の課題にコメントすることが求められると思う。一方、私の担当するレベルのクラスは英語に苦手意識があるので、できるだけ不安を取り除き楽しく学習できるよう教員の配慮も必要だと感じている。そのため、warming up exercises としてドラエモンの日英版を読んだり、英検の3～4コマまんがなどを narrate するといった academic writing とは少し方向性の違う教材も時々取り入れることによってメリハリができることもあると思っている。学生は比較的楽しんだようである。

・大人数のオンライン授業では、対面授業特有の、クラスメートとの気軽な話し合い、確認し合い、助け合いがどうしても欠けてしまう。来年度以降も対面・オンライン授業それぞれの特性をよく考慮した上での授業計画が必要だと感じる。

・一方で対面での質問よりも、Google Forms などオンラインツールを使用した形だとより質問しやすいと感じる学生もいたようだ。対面授業が再開した場合も、オンラインで効果的だった手法は併用していくのが良い。

I think we could coordinate more closely about what we do and the specific skills we want our seminar students to develop, particularly in relation to their final theses: researching, paraphrasing, referencing & citation, and so on.

本授業は動画を配信するオンデマンド方式で行った。この方式により、学生が授業を繰り返して見られるというメリットがあったと思う。また、印刷したいという要望があったため、もとのパワーポイント静画も共有することにした。

(a) オンライン授業において双方向性を保つために、学生が書いた毎回のリフレクションペーパーを1つのファイルにまとめて、優れた振り返りにマークをし、コメントを書き入れたり、質問に答えて次の授業前に共有した。加えて授業開始時に、短時間で説明を加えたことで、クラス全体のリフレクションペーパーのレベルが学期を通じて上がっていったと感じる。

(b) 学期後半に行った対面授業について、学生から「集中力を効率よく保つため（オンライン授業と同じく）100分の中で休憩時間があったほうがよい」という要望があった。来年度の授業構成を考える際に参考にしたい。

(c) 「なじみの薄いテーマに入るときに、やや難しいと感じたため、導入的な説明をゆっくりとしてほしい」という要望があった。2年生から大学院生まで受講できる授業であったため、難易度の設定にむずかしさがあった。今後同様の条件で授業を行う場合には、学生の理解度を把握し、特に導入部の説明をていねいにしたい。本授業に関しては、来年度は学部のみ授業として開講するため、この点は改善できる見込みである。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

・ゲストスピーカー（専門家）による専門性を活かした講義の後、それにヒントを得た学生が課題に取り組み、さらにゲストスピーカーから直接、課題へのフィードバックを行ったことは、学生の学習意欲や応用力を高めるのに効果的だった。

・各種の課題への担当教員からのフィードバックに務めた。とくに継続して全員で取り組む翻訳課題への教員の講評と実践例の紹介コーナーを授業内に設けたことは学生に好評だった。・実技等への取り組みを取り入れたことは、学習内容の応用と同時に学生の協働を養うのにも効果的だった。

・協働的な学びを通して専門知識を身に着けるという演習授業としての授業到達目標を、コロナ禍にあっても果たすべく、オンラインツールと教室内での協働がしやすい学びの空間を作ることを意識する。

・英語のリスニングレベルや自発的なスピーキング意欲の違う学生に配慮をする。
・オンラインでの活動が多くなると、これまでの対面授業時に比べ、学生間の英語力や授業理解度の差が把握しにくく、又差を縮めるのが難しい。授業時間以外で質問をする学生が少なく、理解できないこと自体を把握する手段が限られてしまうため、主体的な学習に頼りすぎると全体的に理解力が下がってしまう。その一方で、発表能力は高まってきており、対面・オンライン両方の授業において、視覚的に資料を提示したりすることに長けている学生は少なくない。内容理解には textual なインプットとアウトプットだけでなく、visual なアウトプットを促すことも効果を示すと考える。

各種 ITC 教育ツール（例えば課題の提出に Sophie、GoogleFoams、GoogleClassroom のいずれを使うか）の利点と限界をよく把握し、それぞれの利点を活かし、限界を補う工夫をすること。

コロナ禍で学生が課題に追われており、とくにあまり器用ではない学生は一つ一つの授業に集中できていない様子が見られたので、予習と復習の量を減らしたうえ、授業内にしっかり学習してもらった。学生の履修状況や学修状況を把握しつつ授業運営をする必要性を感じた。

この授業は世界史コースの慣例として3年生と4年生合同で実施しており、学年を超えた繋がりができ、卒論の執筆や就職活動について情報交換ができるようになるという利点があるため、学生からも好評を得てきたが、今回のアンケートでは一部の4年生から、3年生と4年生は別々に授業を行った方が良いのでは、との意見が寄せられた。2つの学年と一緒に授業に参加することで得られることも多いと考えられるが、一部とはいえこのような意見が出たことを踏まえ、来年度の演習では最初に授業の運営方法について学生と相談する機会を設けたい。

・上記のような意見を別にすれば、この授業に対する学生の評価は高く、「先生が発言しやすい雰囲気作りをしているので、他の授業よりも積極的に発言できた」「プレゼンの仕方や論文の書き方等を一人一人丁寧に教えてくださったのがとても良かった」「論文の書き方を正しく知ることができ、今後の卒論執筆に役立つ」といった意見が寄せられた。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

穴埋め形式のプリントの配布は、授業評価アンケートで高い評価を得ました。オンライン授業で目が疲れますので、授業時間の半分以上、一度 5 分間の休憩を入れました。これも授業評価アンケートで好評でした。

オンライン授業でしたが、毎回名前を呼んで音声で出席を取ったことで、学生との距離がいくらか縮まったように思いました。

TA に前回の授業の課題の解答例を作ってもらい、それを使って、授業冒頭で前回の復習をおこないました。理解の定着に役立ったと感じました。

音声を貼り付けたパワーポイントファイルと資料の PDF ファイルを Classroom にあげるという形で授業を行った。音声は台本を作ってから録音したので、シラバス通りに授業が進むのはよいのだが、必要な内容を無駄なく話すことに神経を使いすぎて、余裕のない話になってしまったことを反省している。次年度は今のところ対面授業ということなので、この点は改善したい。

プレゼンテーションだけなら、zoom に集合すればよいが、人数が多いこともあり、なかなか全体のコミュニティ形成が困難であった。3・4年生をシャッフルした小グループも作ったが、対面の機会がない状態でコミュニティ形成はできなかったようである。コロナ前は3・4年生合同合宿をしていたが、コロナ禍ではオンライン形式で実施した。3・4年生をシャッフルしたチームでプレゼンコンペを行ったのは、プレゼン自体もおもしろかったが、共通の課題があるとコミュニケーションも活性化し、コミュニティ形成にも貢献したようである。

本講義は理系的な内容であることから苦手意識が高く、授業に対する事前の期待度は全般に低い。関心度が低く、苦手意識が高い受講生から、統計学への興味や自分でもできそうだという効力感を引き出すことが重要である。

産学連携授業として、試験的に新設した科目である。企業側からテーマの提示と、それに関連する企業側の資料・動画やデータの提供を受けて、学生は小グループに分かれて市場や消費者の動向を研究、新規の事業について企画を立案するという流れである。今回は、下着メーカーのワコールと連携し、ワコールの開発した3Dスキャナを活用、今後の下着市場に対して新作や新規プロモーションを提案した。最終日にはプレゼンコンペを行い、企業から各企画に対するコメント、ならびに優秀企画に対する表彰が行われた。

社会調査実習3は、日本の伝統的産品を作る職人に関するフィールドワークを実施する授業である。コロナ禍での実習は、小さな工房に学生が伺えない事が大きな障壁であった。しかし、オンラインインタビューの良い面を活かして、北海道のガラス工房、鹿児島島の藍染め工房などと繋がることのできたのは、興味深い経験となった。

・インフォーマントに対しては、下打ち合わせも含めて、長い時間の情報提供をお願いする事になる。これまで3240円の菓子折一つで済ませてきたことは不十分ではないかと心配してきたが、「ものづくり体験」の資材を工房から購入することで少しは先方へのお礼になるのではないかと思う。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

・ほぼ、オンラインでの授業となった。文献発表など、学生が発表しそのあとの議論がなかなか進まない状況が対面授業よりあった。教員と学生の面談を行う上では問題はない。

大人数の授業でリアルタイム型のオンライン授業を実施するには限界がある。一定人数を超えた授業はオンデマンド型にするなどの対応が必要と考えられる。

履修者からのコメントなどをとりまとめて次週フィードバックすること。

数回に渡り、受講者の意見を聞き、全体的に満足度が高かったです。ハイブリッド授業（特に板書問題）に関して改善を求められましたが、コンピューターやタブレット端末を使用し、解決できました。また、2021年度に使用した教科書に付いている音声・動画はネットからアクセスしにくかったので、来年度からは充実した日本語の説明が付いているネットサイトがある出版社の教科書に変えました。

評価の方法については明確にすること。各回の課題を授業時間外に課しすぎず、授業時間内に学生同士で話し合わせたり授業内で記述したものを提出させたりすること。何のために該当授業で行われる講義内容を学ぶのかという大枠、授業目標を明確にすること。テストを行う場合は模範解答を示すなどしてフィードバック、振り返りの機会を設けること。（テストは成績評価のためではなく学生自身の確認のため。）

授業の録画を Meet で録画しクラスルームに毎回アップすることは学生に評判が良いようであるが、これはコロナ禍以降可能になったサービスである。学生からも「コロナが終わったらこれがなくなるのかと思うと不安だ」という声が多かった。確かに学びは学生にとってはじめて聞く内容が多く、一度で理解するのはなかなか難しいのかもしれない。「繰り返し何度も観て復習しやっと理解できた」という声に、今までの対面授業ではさほど分かってはいなかったのか？とも思った。録画をアップし課題提出で出席としていたので、その場に出席せずオンデマンド的な使い方をする学生も多かろうと想像したが、比較的真面目にリアルタイムで出席しているようであった。とはいえ学生の様子が見えない状態で講義を行うには、学生を信頼する力が必要だと感じた。

コロナのためか、本学の学生の質の変化かは不明であるが、学生の学力と理解度は徐々に落ちているようにも思う。また、それに比例して社会に対する視野が限られてくる印象を受ける（この授業ではないが、「貧困とはアフリカの現象かと思っていた。アメリカや日本のような先進国にも貧困があるとは知らなかった」などのコメントに、教員は少なからず危機感を感じた）。高い知識と思考を求める学生と、その理解には追い付かない学生とが混在する授業で、学生の満足度を上げていくには授業の仕方を変えていかななくてはならない時期にさしかかっているのかもしれないと思う。考えてみたい。

例年使用している教科書の見直しをした方がよいかもしれない。近年の学生のレベルの変化に対応する必要がある。非常勤講師の先生方と相談して決めたい。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

必修通年科目のオンデマンド授業であることから、受講生が1年間を通じて、本授業へのモチベーションを保ち、課題を提出しつづけられる工夫が必要になると考え、そのために下記の3点、①ゲストスピーカーの招聘、②学生同士の意見や課題の共有、③毎回の授業動画の時間と内容の工夫を強化した。その結果、授業評価アンケートの自由記述欄にみられるとおり、①と②については高評価を得ることができ、一定の効果を得ることができた。しかし一方で、後期から課題提出が遅れがちになる学生が出現し、オンデマンド授業ゆえにそのフォローが難しい部分があった。今後も、大学の授業のみならず、様々な場面でのオンデマンド研修等が増えると思われる。学生がオンデマンド授業に否定的な評価を持たないよう努めたい。

対面で出席している学生が30名ほど、オンラインのリアルタイムで出席している学生が7名ほどいるクラス編成となった。本授業が大学での最初の対面授業となった学生が多かったことから、あえて毎回各人の名前を呼び出席を取り、授業内で受講生に感想を聞いて回り、毎回丁寧にリアクションペーパーの共有を行った。これにより、ハイブリッドであっても学生同士がつながる雰囲気が自然にできあがり、授業評価アンケートの自由記述にみられるとおり、他の学生の意見におおいに刺戟を受けたとの感想を得ることができた。しかし一方で、丁寧に対応するあまり、予定していた哲学者を授業内で詳しく取り上げることができず、資料などで補足せねばならなくなった。ハイブリッド型の授業の善い事例があったらぜひ学びたい。

オンラインでの受講希望者が一定数いたため、ハイブリッド形式の授業となった。そのため、グループワークのさいは、オンラインで参加する学生だけのグループを作った。作業については、教室での受講者グループとオンライン・グループとを同一のものとしたが、オンライン・グループのサポートについては、十分に行き届かなかった面がある。オンラインでの特徴を活かすような試みを考えるべきものと思われた。

レジュメやレポートの作り方の指導は、実物を使って説明すると効果的。例をひとつ作っておいて、これと同じように作ってみて、と指導

当初よりオンライン指定した演習を試みたのは初めてであったが、対面指定にしておいた授業のように、感染状況に応じて対面になったりオンラインになったりという混乱がなく、またハイブリッド対応で学生に迷惑をかけることもなかったため、落ち着いて演習に取り組めて、時間を有効に使用することができた。

日本思想史の演習は、レジュメや補足説明などでたくさんの資料を必要とするが、オンラインのためにペーパーレスで行えたこと、画面上でその場で修正したり、指し示したりすることができることなど、大変便利だった。「芸能」をテーマとした演習であったため、画像や動画を観る必要のある場面も多かったため、この演習がもし対面でテレビしか設置されていない小教室で行われていたら、同程度の情報を共有することは不可能だろうと思った。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

・全面オンライン授業であったが、毎回かならずリアルタイム接続とすることで（驚くべきことにほぼ全員毎回問題なく授業に参加していた）、100名の受講生とある程度の繋がりを持つたと感じている。特に毎回授業冒頭で、音楽室保有の民族楽器を示しながら音を聴いてもらい、特徴や文化的背景を説明する時間が好評であったのだが、このことは画面を通してであっても受講生がリアルな経験を味わうことができたからではないかと考える。受講生にも確認したが、zoomによる「オリジナルサウンド」の設定は音をよく伝えてくれており、次年度はこの時間を一層充実させるように備品の充実を考えたい。

・視聴覚資料を多用する授業であったので（もちろん長時間視聴させっぱなしということはない）、昨年度 Google meet では使い勝手が悪く苦勞したが、今年度 zoom 利用できるようになってスムーズになった。動画再生は、受講生の接続環境等で問題が起こることも予想されたので、推奨する動画の Youtube URL を提示して授業時間外に視聴するよう指示するなどの工夫を極力おこない、受講生が動画を視聴したかどうかの確認はリアクションペーパーを通して行った。このやり方にはほぼ問題はなかった。しかし本当に見てほしい動画は Youtube では配信できず、たとえば DVD（パレスチナとイスラエルの若者が協調するバレンボイムとサイドのプロジェクト、とくにドイツでの若者のディスカッション風景やガザ地区での実際の演奏会／ベルリンオリンピックにおけるマスゲームと表現主義の対比を理解するような動画の組み合わせ／日本においては太平洋戦争下学徒出陣式における海ゆかば演奏風景／等々授業の主題に直結する動画）を見せることは大変難しかった。学生のリアクションペーパーでは、バレンボイムのラマラコンサートの光景（一部）を見て「この授業の集大成だと感じた」という記述があり、ハードルが多々あっても、一部の学生は真摯に取り組んで授業の趣旨を理解してくれたと感じた。

・授業評価アンケートではゲスト講師（東京大学総合博物館教授 海部陽介氏）の授業内容に刺激を受けた、面白かった、来年も是非（自分は受講しないにもかかわらず）という記述が多かった。学際的知見、とくに自然科学系の知見にも触れてほしいと思うが、ゲスト講師招聘には制限があり、授業者が知見を紹介するのみにとどまらざるを得ないが、やはり専門家本人の話には迫力と奥深さがあると感じた。

ひとつのテーマのもと、学際的な知見の最前線に触れるような授業がもっとあってもよいのではないかと思う。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

本授業では、事前に資料を Google ドライブにて配付し、予習を行いワークシートに「感想、考察、質問」を書いて授業に臨むことを前提としている。授業時間内には予習をもとに、学生同士のグループディスカッションと、教員も交えた全体での質疑応答を行うという、反転型学習の構造をとっている。予習を行うことにより大学の単位制度の理解と学習習慣の定着を図っている。そして、授業時間内での「資料・根拠をもとにした考察」の発表・他学生の意見への傾聴を通して、論理的思考力、批判的思考力、公共性などの資質・能力を涵養する仕組みとなっている。

学習内容としては、学校現場で活用される多様な教育方法について理論を学びながら、事例検討を行うようにしている。4 年次の教育実習を経験する以前の学生は、教育現場での実践のイメージ、児童・生徒の具体的な姿のイメージが持ちにくい。本授業で導入しているケースメソッドにも限界がある。本授業の一環で学校現場に連れて行く機会を設けたり、授業場面の映像を活用したりして、これらのイメージを持ちやすくして、理論と実践の往復を学生が実感する機会を作り出したい。

オンライン授業、対面授業（実習）については比較的好評だった。一方、数人対面授業に参加が難しくハイブリッド形式で運用する際、実習やミニレポート作成作業など、公平性を期するための指示や仕組みが複雑になり、効率が悪かったので次年度は改善したい。

本授業は受講者数が多いため、2年続けてオンライン授業となりました。特別な支援が必要とされる学生が5名ほどおり、毎回の授業を録画することが求められました。リアルタイムで授業を実施しているにも関わらず、録画をするとリアルタイムでの講義への集中を欠く学生が多くなるのではないかと危惧されましたが、留学生も多く受講していたため、日本語がわからなかった部分などを見直すことができるのでよかった、という感想もありました。また、授業用資料の配布、講義録画へのアクセスや学生のレポート提出に、Google Classroom が大変便利でした。

「コロナ禍でこの授業に出会えて、これからどのようなことを意識して生きていくべきなのか明確になりました。コロナ禍で様々な知識を身につけられたのはこの授業のおかげです。」という感想を自由記述で受け取ったが、授業を進めていて効果的であると思われたのは「答えのない問い」を中心に据えての講義であった。予想困難で不確実性の時代を生きていく将来世代に必要なスキルでもあることを意識した。また、学生時代に生涯問い続けられるような良質な問いと出会うことは重要な体験であると思われる。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

今年度の本授業では、学期の前半に行った講義編の内容を踏まえて、学期の後半の実践編でまず受講者各自に自分なりの学習指導案の作成課題を課し、次の時間にその課題を持ち寄って、小グループで検討し合うディスカッションの時間（および、その後の受講者全体への共有の時間、そして授業担当者からの講評の時間へと進む）を設けた。加えて、毎回のコメントペーパーの内容をいつもスプレッドシートにして受講者全員に共有しつつ、代表的な感想や質問には個別に教員のコメントも付すようにして受講者全体へと開示するようにしていた。学期の最後に行ったアンケート調査の結果を見ると、こうした教員・学生間および学生・学生間の双方向的な授業方法が特に評価されていた印象を受けた。

さらに、学期の前半に行った講義編では、オンデマンド動画配信でも講義を行ったが、こちらについても、分かりにくかった箇所や忘れてしまった箇所を何回も聞き直して復習できて学習効果が高かった、別の授業や用事があってどうしても忙しいときなどに自分なりのペースで学習を進めることができたなど、意外に好意的な意見が多かった。例えば、思考の前提となる知識を授受すべき学習段階など、授業内容や学生の学習段階によっては、オンデマンド動画配信もかなり学習効果が高い授業方法であるように感じられた。ただし、こちらについてもやはり、単なる一方的な動画配信だけではなく、例えば毎回のコメントペーパーに対する授業担当者の反応（コメント）があることなどとセットで考える必要があるように思う。また、オンデマンド配信動画を作成する際にも、学生たちに自然に呼びかけるようなリアルな話し方となるように意識するなど、自分なりの工夫をした。いずれにせよ、学生は、授業を受けたという「手ごたえ」がほしいのではないかと感じられる

受講生にプレゼンテーションを求める際に、事前に評価されるポイントを解説し、それらを記入した評価表を配布して、受講生全員が評価するシステム（ピア評価）を採用した。

一方的に話すだけの講義では退屈を感じる学生も多いので、学生の積極的な参加を促す必要がある。

オンラインで授業を実施するならば、ライブ配信であれ、オンデマンド配信であれ、学生と直にコミュニケーションできる機会を保証する必要があると思います。受講生はとても孤独を感じていると思われます。

心理学科の教員6名によるオムニバス形式の授業であり、2021年度はGoogle Classroom, Google Meetを用いてのオンライン授業であった。オンデマンド型とリアルタイム型の両方の授業があり、教員によって課題も異なるものであったが、概ね学生の満足度は高かった。Google Classroom上で教員がお互いの資料を確認することにより、内容の重複を避けたり、より発展的な内容を盛り込んだりすることも可能となり、FDにも活かすことができると思われる。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

初回にテキストの発表者を決め、毎週、発表者以外も事前に該当章を読ませ、質問の提出を義務づけた。プレゼンテーションを行ったあと、授業中に教員がコメントを行い、事後学習として全員にリアクションペーパーを義務づけ、それらを受けて教員によるコメントを加えた。期末にはレポート提出とレポート講評を行った。学生の自由記述を見ると、かなりの時間がかかって大変だったようだが、おおむね、好評であった。

授業では、レジюмеよりもパワーポイント資料のほうが好まれるようである。

【長文の振り返りレポートについて】

本授業では、臨床心理学で多職種連携が必要となりつつある周産期の医療領域を扱いました。内容的には、妊娠・出産というこれから多くの女子学生が経験する周産期において、心理学の枠を超えて支援を受ける側としても知っていたい知識について触れています。ネガティブな状況についても「自分ごと」として考え、自身の周囲の人の経験に対しても想像したり共感できること、様々な状況に対する対応を自分の言葉で考えられるようにするために授業の度に長文の振り返りのレポートを設定しました。

【前回の振り返りレポートへのコメントを行うこと】

臨床心理学を学習中の学生にとっては、基本的な内容を理解することが必要と思われるため、前回の授業の振り返りの一部を次回の授業で紹介しました。授業の次の回にフィードバックを行うことで他学生の理解を共有することで、一人ではわからない様々な意見のあることを知ったと書いている学生も多かったです。ただし、授業時間の多くが振り返りで使われたことに対しては、「指示した字数が多い」「振り返りの時間が多すぎる」といった感想も多かったことには留意することが必要と思われます。

オンラインでの実施で、授業の最初 10 分に Google Meet のライブで前回の小課題の振り返り、質問への回答、イントロダクション等を行い、その後オンデマンド動画を視聴して、課題に取り組むという形で工夫をした。Q10 でも比較的その工夫が良い評価につながっていたかと思う。

・75名のオンライン授業の場合は、学生一人一人にカメラを付けてもらうのが非常に困難であったため、学生たちの学習する様子を把握することができなかつたため、この点は今後のオンライン授業の改善点として引き続き検討していきたいです。

・少人数であったため、欠席者がでた場合は、該当学生と個別に日時を調整し、次週授業前にオンラインでの個別補講の措置を取る工夫を取り入れてみました。この措置は、欠席者が次週授業内のグループワーク等で遅れを取ることなく進められたため、教員にとっての負担は多少大きいですが、引き続き取り入れていきたいと考えています。

・今後は、学期末に課した社会活動に関わる課題の告知をもっと前広に行いと思います。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について

・講義中に投影していた講義資料の共有要望がごく一部の学生から出ましたが、本資料は原則としてメモを取る範囲内であるため、今後も共有をする必要性が生じた場合は、その方法について検討をして参りたいと思います。また、メモの取り方の工夫も学生たちに提示したいと考えています。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

毎授業後に、その週の復習課題を Google Forms で出していた。その際、自由にコメントや質問記入してもらい、次の週の授業冒頭で質問に答えたり、補足説明をしたりした。これが学生にも好評であった。

人数の多い Zoom 授業であるため、カメラオンやブレイクアウトルーム使用は困難であったが、その代わりにチャット機能を多用した。授業内に簡単なクイズをだしその答えを書く、例をあげる等のために、チャットを使用したことで積極的な参加を促すことができた（ただし、学生の参加度には差があった）

リアルタイム型の授業であったが、復習をしたい学生のために録画を1週間ほどアップロードしていた。学期末アンケートにも「難しかった箇所を録画で繰り返し確認できて良かった」と書いている学生が複数おり、とくに英語による講義であったためこれが効果的だったように思う。

Presentations work well because they encourage students to share and discuss work; choosing lecture and seminar topics that are relevant to their lives and will engage them in debate and discussion. Encouraging students to think of teachers as facilitators rather than oracles.

課題に対するフィードバックがあったことを評価する声が多かった。一方、もっと詳しく前回の課題解説をしてほしいという意見もあり、フィードバックが重要であることがわかる。また、オンデマンド方式ではあるが年に数回 Google Meet によるリアルタイムで質問等を受ける時間を設けたことが評価された。

(a) 丁寧なフィードバック（リフレクションペーパー、プレゼンテーション）

フィードバックを重視した。全員のリフレクションペーパーに次回授業前に Google Classroom で、授業開始時に紙面を見ながら毎回フィードバックを行った。グループプレゼンテーションについては、全体と個別にわけて授業内でフィードバックを行った。いずれも学生の動機づけに有効に機能したと実感した。「何がよかったか、どこを改善すべきかを見てくださったので、良かったです」「説明がとても丁寧であり、フィードバックも毎回必ず行ってくださったので、とても満足しています」などの回答があった。Google Classroom を利用したフィードバックは、もともとはオンライン授業期間に授業の双方向性を確保しようと始めたが、対面授業に移行してからも継続したことでさらに効果の手応えがあった。別途実施した授業アンケートでも授業に積極的に取り組む励みになったという意見が多く見られた。

以下にいくつか例をあげる。「最初は読んで自分の言葉で考えをまとめるのが難しく長い文章を読むのが億劫でしたが、毎週他の方のリアベと先生の講評を聞くたびにコツがわかり英文学独特の世界観の良さが分かるようになったのでこれからも（中略）少しずつ他の英文学を読む挑戦（を）してみようと思いました」「毎回のフィードバックで、自分のコメントについて褒めて頂いたり、アドバイスを頂けることが、自分のモチベーションになっていました」「先生からのコメントを頂いた後、また自分で考え直したり、考えもしなかったアイデアがさらに膨らんだりなど、学べたことが多かった」。

受講生数が増えるとそれだけフィードバックにも時間がかかり、個別フィードバックはむずかしくなる。大人数となった場合に、クラス全体にいかにか効果的なフィードバックをするかは今後の課題である。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

(b)プレゼンテーションとクラスディスカッションの連動

前期後半には、グループプレゼンテーションを対面（オンライン受講者なし）で実施できた。プレゼンテーションには、クラス全体のディスカッション用の問題提起も含むことを義務づけた。問題提起を意識することで一貫性の生まれたプレゼンテーションは、クラスディスカッションの材料も提供することになった。ディスカッションでは、プレゼンテーションに刺激を受けた発言が出るなど、発表内容をきっかけにより深い学びを達成したことがうかがわれた。

授業アンケートでは以下のような意見があった。「プレゼンテーションの準備を行う中で、作品を深く読み込むことができました。また、他のグループによるプレゼンテーションを聞いて、自分には思い浮かばなかった考えや、気が付かなかったこと、印象的なセリフなどをたくさん知ることができ、毎回、とても刺激的でした」「意見の交換を通して自分の考えを深めることができました。特に、授業で扱われた作品はオープンエンディングがほとんどだったため、それぞれの想像する結末を聴く作業を通して、その人の価値観やそのテーマに対する姿勢を知ることができました。」「プレゼンテーションを聞く回はどれも面白く感じた。特にグループプレゼンテーションは、今まで見た中、やった中でもとても充実性があったプレゼンテーションになりました」。

今年度は、例年と比べて受講生が少なく、大学院の受講生2名を加えても20名以下という少人数授業であった。このためグループプレゼンテーションの問題提起を受けてクラスディスカッションに円滑に進むことができた。大人数になった場合はグループディスカッションという形態をとったほうがより学びが深まると予測される。今後も受講生の規模に応じてディスカッションの形態を考え、工夫を重ねたい。

(c)多様な文学作品の理解方法

授業で扱った短篇作品を視覚化する活動をグループプレゼンテーションの一部に取り入れた。作品の一節や一つのモチーフを選び、それを元にして自由に作品制作をした。短篇小説に登場する架空の魚(Moonfish)をゴム風船で制作する、イラストを作成するなど受講生の創意を生かす活動ができた。これによって、言語だけで分析・鑑賞をする場合と比べて文学作品理解のための間口が広がった。人間の動物に対する歴史的横暴を熊たちが裁判所に訴えるという物語のときに、作品に書かれたディテールを元に実物さながらの訴状を作成した大学院生の作品は学部生に大きな反響を巻き起こした。こうした多様な理解の手段を取り入れることで、文学作品に馴染みのうすい受講生も授業に貢献しやすくなり、クラス全体で作品の読解を深めることができた。たとえば、以下のような感想が受講生からあった。「私は“Bees”の絵を担当したのですが思ってたより好評でかつ、リアペで一番熱入れて書いたのがそれがクラスメイトとディスカッションの質問に採用されたので聞いてて楽しかったし、自分と違う意見が来た際、「なるほどね～」と思いながら聞いていたので英文学を讀んでの考え方が分かりました」「他のグループプレゼンテーションを見て、この人はこの文章からこういったイメージが湧くのだな、と可視化出来るところも良かったです」。文学は自分には縁遠い、むずかしいものと考えている受講生にとっては、別の受講生の創作的活動を見ることは教育的に非常に効果があると感じた。こうした授業活動は今後も継続したいと考えている。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

(d) 大学院生と学部生の交流

本授業は、大学院英語英文学専攻の「20世紀英米文学研究Ⅱ-1」との同時開講であった。学部受講生14名のほかに、大学院授業として2名が受講した。大学院生はグループプレゼンテーションに先立って単独でプレゼンテーションをしたほか、学部生のグループプレゼンテーションにも参加した。上記(c)で言及したように、大学院生の単独プレゼンテーションは学部生にとってよい手本となり、大学院生の発表回の授業後には、刺激を受けて互いに話し込む様子も見受けられた。またグループプレゼンテーションでは、大学院生がリーダーシップを発揮して異学年からなるグループを上手にまとめていた。大学院生が少ないための同時開講ではあったが、思わぬ効果が見られた。

- ・歌唱指導や演技指導役の学生のアドバイスのもと、実技を行った。
- ・グループやペアによる発表や課題を課すときは、毎回メンバーが固定しないよう工夫し、マンネリ化を避けた。
- ・英語への苦手意識解消のため、身近なテーマについて発表・発言する機会を設けた。
- ・学生が教室内を自由に移動しながら質疑応答できるように、ポスター・プレゼンテーションの機会を設けた。

・学生による文献のプレゼンテーションとクラスディスカッション、Google Classroom 上でのフォローアップディスカッション、教員による文献の構成の説明などを組み合わせた。プレゼンテーションやディスカッションは、学生の主体的な学びと理解力の向上に役立った。特に、発表者がディスカッショントピックを自分達で考え、クラスメートの意見を聞くことで、文献の論点を整理したり、概念の具体化をしたりすることができた。その後に Google Classroom でさらに時間をかけて各自が意見を考えることで、英語を話すことが苦手な学生でも発言できる機会になった。

- ・ Google Classroom でデータ分析に役立つビデオやインターネットサイト、写真などを data pool として共有し、互いにアイデアを得ることや、協働の促進に役立てた。
- ・教室のレイアウトを変更し、ハイブリッドの参加者も孤立しないような機器の配置（教室備え付けのマイクとスピーカフォンを併用し、スピーカフォンはコの字に置いた机の中央に移動）。教室で参加している学生がラップトップ画面越しに会話をせず、教室内のクラスメートの顔をみながら活発なディスカッションができるような工夫をした。これにより前期はオンラインやハイブリッド授業でも教室参加者が若干名しかいない状況だったが、学生間の距離も縮まったようである。

- ・講義の授業が単調・受身にならないよう、クイズやグループディスカッションをはさんだりして、変化をつけた。
- ・オンラインの授業であったが、チャット機能や投票機能等を使い、学生から意見や例を挙げてもらい、双方向の授業になるよう心がけた。
- ・リアクションペーパー（Google フォーム）にはわからなかったことや授業中に自分で考えたことを書くように指示し、翌週の授業の冒頭でコメントしながら紹介した。特に、留学生のコメントは毎回興味深く、これら紹介することで、日本人学生の日本語に対する考え方が変化し、いい刺激になったと思われる。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

古典文学を原文で読むという授業の性格上、これまでもなるべく分かりやすい配布レジユメの作成を心がけてきたつもりであるが、今回はオンライン授業ということで、よりレジユメ作成に工夫をこらした。具体的には、従来口頭ならびに板書にて説明してきた語注や系図をあらかじめレジユメに掲載しておく、トピック毎に細かく小見出しをつけて切れ目を明示する、などの取り組みを行った。とはいえ、全ての情報をレジユメに載せるのではなく、一部を穴埋め形式にして「授業を聞かないとレジユメが完成しない」という状態にもすることで、学生の積極的な参加を促した。

授業の進め方としては、配布レジユメを画面共有して口頭での解説を加えるほか、適宜パワーポイントを用いて表や画像も示すことで、視覚的にも理解を深めることを目指した。また、授業開始時やトピックの変わり目にチャイム音等の効果音を使用して、授業にメリハリを付けるようにもしてみた。アンケート結果によると、これらの試みは概ね好評だったようである。

また、オンラインの特性を活かし、授業内課題の解答結果をリアルタイムで共有してのフィードバックを行った。他の学生と間接的ながらも触れ合うことで刺激を受けたようで、その後の取り組みの態度もよかったように思う。その他学生へのフィードバックとしては、授業後に提出されたリアクションペーパーの内容を抜粋し、教員のコメントとともにプリントにまとめて配布することを行った。学生にとっては、疑問点や理解不足の箇所への補足となっただけではなく、モチベーションアップにも繋がったのではないかと考えている。

リアルタイム型とオンデマンド型を組み合わせたオンライン授業。

「リアルタイム型とオンデマンド型を組み合わせたオンライン授業。課題を提示して解答を提出させるオンデマンド方式に加え、課題に取り組む前の解説や、前の課題のフィードバックをリアルタイム方式で行う。ブレイクアウト機能を用いた受講生間のグループディスカッションも実施した。この方法が授業アンケートにおいて、課題にじっくり取り組むことができる、授業が理解しやすい、などと好評だった。」

コロナ禍で学生が課題に追われており、とくにあまり器用ではない学生は一つ一つの授業に集中できていない様子が見られたので、予習と復習の量を減らしたうえ、授業内にしっかり学習してもらった。学生の履修状況や学修状況を把握しつつ授業運営をする必要性を感じた。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

1) リモート形式の講義であるが、画面共有用の講義レジメはあえて作成しなかった。チャットを板書のように利用して学生に各自でノートをとってもらおうという形態を取った。そのほうが集中して聴いてもらえると思ったからである。

2) 授業時間が100分となったこと、講義がリモートになったこと、この2点を利用して昨年度から講義のやり方を変えた。

これまでの教室の講義では長年、リアクションペーパーを配布、回収して翌週の冒頭15分間で、いくつかのコメントに対して回答するようにしていた。その反響も悪くなかったが、この方式を変えた。こちらからの話を60分程度で終え、ペーパーのかわりにチャットにコメントを記入する時間を20分程度与えた。最後の10分から5分程度で、2、3のコメントについて記入者の学生を指名し、カメラをオンにして口頭でもう一度質問してもらい、これに私が答えるという形にした。

各回のフィードバックがその日のうちに出来ること、他の学生のコメントが読めること、リモート形式で学生がかえって発言しやすい(と思われる)こと、この3点のメリットを期待した。

私自身はこの方式に満足し、継続したいと思っているので今回の評価はその点に触れる反応を期待したが、以下に触れるように、回答数があまりに少ないので期待は外れたと言ってよい。

この授業は通常1号館2階ないし4階の演習室で実施しているが、パワーポイントをスクリーンに映すための機材が備えられていないため、今回は学生の希望もあって場所を3号館344番教室に変更し、パワーポイントをスクリーンに映してプレゼンテーションを行うことが可能となった。そのため発表者は教壇に立って他の学生と対面する形でプレゼンテーションや質疑応答を行うことができ、その後のディスカッションも活発になったと考えられる。

この学年は1年次にオンライン授業が多かったため、こうした形式でのプレゼンテーションやディスカッションは新鮮な経験であったようで、「こんなにみんなと楽しく学べる授業は初めてだった」「ハイブリッド型の授業はオンラインを選びがちだったが、いつも楽しみに授業に参加できた」「議論が活発で参加する意義が大きく、面白い」「新たな知識を身につけるだけでなく、ディスカッションやプレゼンの力も身についたので非常に勉強になる授業でした」といった感想が寄せられた。

昨年度はコロナ禍の影響でオンライン開催となった授業も多く、少人数の演習形式の授業でスクリーンのある教室を使用することが常に可能であるとは限らないが、演習で対面授業が可能な場合には、パワーポイントをスクリーンないし大型テレビ画面に映して発表とディスカッションを行えるような環境を整えていければと願うものである。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

授業の内容の振り返り（授業内容を理解できたかを確認する簡単な問題）と、感想質問を書いてもらう部分をグーグルフォームで作成し、毎回記入してもらいました。穴埋めプリントの穴の部分から問題を出して、授業を聞いていないと回答できないようにしました。そのため、オンライン授業（リアルタイム配信）でしたが、よく聞いてくれたようです。

授業のはじめに前回の授業後に出た質問にまとめて解答しました。授業をよく聞いたうえで出してくれた質問には「いい質問」「ポイントをとらえている質問」「鋭い質問」等のコメントもつけました。それによって、学生たちは一生懸命質問を考えてくれたようです。

毎回、授業内容に関する質問・感想・要約を提出させ、質問や誤解に対しては毎週 Q&A を作成、配布して正しい理解を促すとともに、授業参加を実感させ、勉学意欲の維持・向上に努めました。

- ・ゼミの共有掲示板を作り、プレゼンターはプレゼン前に資料を上げておく。
- ・個人面談は zoom の活用が有益。お互いに場所に縛られないため、指導回数を増やせる。事前に学生に割り当ててあるドライブに資料のファイルを上げておいてもらい、それを zoom 画面で共有する形にして、その場で一緒に見ながらコメントしたり、編集したりできる。

Zoom を用いたリアルタイム型授業で、Google フォームを用いて授業中にデモンストレーションを行い、休憩明けにその結果を用いて理論を説明するなど、大人数の講義でも双方向の授業が可能になった。授業後は、出席確認を兼ねた知識チェックを行い、平常課題とした。

成績評価は、毎週の平常課題（基礎知識の習得）、レポート課題（時間をかけて勤勉に取り組む課題）、オンラインの論述試験（時間制限がある中で総理解と応用を問う課題）に分けることで、バランスよく、総合的に評価できた。

Meet による講義であったが、授業中、小さな質問や問題を提起し、チャットで全員に回答を求めた。これにより、学生間で一定の競争意識が喚起され、受講生の多くが授業内容に向き合えたように思う。また、授業を受けることで、以前に理解できなかった内容が理解できるようになったという自覚を持たせるよう、促すことも効果がある。また、社会統計学への関心は、この知識や技能が社会の中でどう活用されるかを説明することで喚起したいと考えている。今後、データサイエンス教育との関連性からも、卒業生の実践例なども示しながらアピールしていく必要がある。

得てして、学生は学内の学修に意味を見出せなくなったり、モチベーションが低下したりすることがあるが、日々の学修がこのような形で社会に生かせることを実感し、また、学外の、特に企業からの視点で評価を受けたことは、充実した学びとなったようである。最終プレゼンは、どれもよく練られていたが、企業の視点に立てば、「他社との競合」「効率性」「確実な利益の見込み」「長期的な市場開拓」といった要素も不可欠で、そうした社会のシビアさも垣間見られたことは、卒業後のキャリア形成においても有益であった。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

学生のものづくり体験は、資材を大学に郵送していただき、職人のアドバイスをオンラインで得ながら学生がものづくりを経験する。工房でゼロから教えて頂くのに比べて、オンライン体験は大した事が出来るわけではないが、それでも学生たちは経験を通して様々な疑問を感じ、インタビューに繋げていくことができる。コロナ禍でも、学生たちの学び方が多面的であると、効果的であると感じる。

・グループに分けて話し合いの機会をもつ。

フォームなどを活用した授業内での意見の聴取（アンケートなど）とその結果の共有。アクティブラーニングほどではないが参加を促す工夫として。

教室で受講した者は、非常に積極的でありました。一方、オンライン受講の者（1-2名）は、カメラオフで、マイクの不具合のため、発言がほとんどありません。これから、大学側はオンラインでの受講ルールを明確にし、強化すべきだと思います。

グループディスカッションが学生の積極性に大変良い影響があった。授業アンケートでもディスカッションについての前向きなコメントが多く、自分の意見をクラスメートに伝えたり、クラスメートがどのような考えを持っているのか知ることが、学びを支える柱であることがわかった。Zoomだとブレイクアウトルームで簡単にグループを作ったり、グループごとに静かに話すことができ、メンバーをシャッフルしたりできるので、教室で実施するよりも教育効果が高かったといえる。今後は対面に縛られず、教育効果を鑑みて、柔軟な授業形態が選べると良い。

講義主体の科目でも、ときどきは問いを提示した上でディスカッションやグループワークを取り入れ、主体的な意見交換や発表をさせることで、学生の積極性や理解度を向上させる効果があると考えられる。

対面の教室内であれば使用できる動画教材がオンラインでは使えないことが、現実の経済現象を示す制約になった。

また、授業の内容を実社会に応用する課題は学生の興味を喚起するようであった。具体的には、学んだばかりの理論や新しい概念をもって、政府や国際機関、あるいは市場の統計表に分け入り、リアルな世界に自分の力で対峙できたときの自己効力感は、学生の自発的学習意欲を高める可能性があると感じた。資料へのアクセスの仕方を解説すること、課題が難しすぎないことは必須のようだ。

毎回の講義後にレスポンスシート（Google Formsを使用したもの）の記入を求めた。「授業内容で気付いたことを2点書く」・「授業内容を簡単に要約する」という課題だけでも、講義を聴く動機付けになった印象である。

オンライン授業では、事前に予習シートを配布した。それで反転授業が実施がしやすくなり、学生の取り組みも、対面より真剣になった。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

課外活動が制限されている時期ということもあるのか、社会で様々な形で活動するゲストスピーカーの話に対する学生の関心はきわめて高く、今後も継続すべきではないかと感じた。

上述したとおり、ピアラーニング的なものをハイブリッドであっても積極的に取り入れることが重要だと考えるが、教員一人のアイデアだけではすぐに枯渇してしまう。他の授業での工夫が共有できる仕組みがあると大変ありがたい。

グループワークにかなりの時間を使用したがる、その際、作業時間を二つにわけ、学生それぞれが二つの異なるグループに属するようにした。それにより、作業にめりはりがつき、適度な緊張感を保つことができた。また、多くの他者と意見の遣り取りや共同作業ができたことは有意義な経験となったようである。

授業中、セゾン現代美術館の学芸員の方から、作品についてオンラインでのレクチャーをいただいた。学生にとって、双方向の遣り取りがあることが積極的な学びや考察への促しとなり、貴重な経験となったと考えられる。

グループごとのアーカイブを作っていく作業には、Googleドライブが大変有効であった。また、大量の動画・画像の共有についても、Google Classroom ならびに Google ドライブを使用することで滞りなく行うことができた。

発表とレポートとを連動させ、レジユメを作って発表したあと、その同じテーマでレポートを作成すると、資料収集などの手間が軽減される。まったく別のレポートを課されると負担が大ききようにも思うし、一貫性が保ちにくい。

以前から、授業前日までにテキストを読んでコメントを Google フォームで提出してもらい、それを授業時に開示している。予習の習慣化にもなるし、議論への参加も促すことができる。また今回の演習では当日のテキストの内容について発表する学生と、テキストに記されている史資料を探して情報提供する学生とを分けた。テキストによってはこのような分割は不要であったり、かえって不都合の生じる場合もあるが、人数の多い演習などでは発表を均等に割り振ることができ、また発表準備の負担を均すこともできる。

・1年生が多く受講するオンライン授業ということで、zoom のブレイクアウトセッションを活用して、「問い」を投げかけて10人程度のグループで意見交換する時間を設けたが、これについては「この時間が面白かった、異なる意見を交わすことができよかつた、もっとやりたかつた」という意見と「対話が盛り上がりず、長すぎると感じた」という意見が出て、学生の評価が分かれた。対面授業であれば、教員が学生の間を巡回して、盛り上がりの無いグループには何らかの支援ができるのだが、zoom だとそれが出来ず、ブレイクアウトルーム一つ一つに入っていくのには限界があり、難しいと感じた。

・①にも書いたが、授業時間外に Youtube の活用はある程度効果があつたが、同時に限界もある。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

今年度は全回オンラインでの実施となり、グループディスカッションの運営が難しかったが、グループディスカッションの意義、コミュニケーションのマナー、困っている学生の実態と配慮のコツなどについて丁寧に伝え、学生に理解してもらうようにした。そして、オンライン授業の割合が多い中、友達ができていない学生も少なくなく、人間関係の構築も意識的に行った。その結果、回を重ねるごとにグループディスカッションは盛んになっていったと感じる。とはいえ、オンライン授業だけでの人間関係構築には困難も多く、他の科目で実施した一部対面の機会があるとないのとは大きな差が生じた。

学習の構造としては、予習課題として資料を読み、事前に「感じたこと・考えたこと、疑問に思ったこと」をワークシートに記載し、授業にてディスカッションを行う反転型学習を導入している。そして、授業時間内には、パソコンからの画像や動画の映写、黒板等、多様なメディアを活用するとともに、ブレイクアウトセッションを有効に活用し、個人ワーク・グループワークを混ぜながら授業を展開した。そして、教授・学習の理論の伝達だけでなく、それらをもとに教育現場で実際に起きうる諸事例を検討するケースメソッドを導入した。ワークシートは、①予習時点での感想・考察・質問、②学生同士のグループディスカッション、および教員を交えた全体での質疑応答のメモ、③「①」「②」をふまえた総合考察、という欄を設けている。

授業内でのグループワークにおいて、積極的に意見交換をしたり、全体発表の場で盛んな質疑応答が行われたりする様子が見られた。そして、テキストを事前に読んできたり、学習理論をもとに自分自身の学習・生活計画を立て・実行し・改善する課題を行ったりする等、授業時間外での課題も積極的に行う様子が見られた。

【本科目で身に着いた資質・能力について学生が振り返った内容の一部】

・ステレオタイプや周囲から見えた姿で児童を見るのではなく、自分の目で見た児童の姿で判断する重要性を学べた。

・ある出来事に対して、あらゆる理由・要因を考える・想像する能力が身に着きました。

・実際の事例を挙げてどのように対応していくかなどといった内容が多く、またグループディスカッションにより他者の意見を聞く機会が多かったので物事を多面的に見る事ができ、よりよい判断ができるようになった。

・全てに対して、なにも知らずに決めつけてはいけない、しっかり子供の耳に傾け話を聴く力をもつ重要性も感じました。

・ノートを取るくせがなく、その時学んだことを忘れてしまったり、話していて「あーなんだっけな」となることが多かったのですが、毎回の提出物を通して、どんな物を読んで何を学んだのか。また、授業でどんな事を聞き学び考えたのかを整理する事でより考えがはっきりしたり、他の授業で教育方法で習ったなと思ったら戻ってきて調べることが出来ました。

・授業をしっかり聞いているつもりでも、総合考察として自分が学んだことをまとめる作業ははじめとても苦戦しました。しかし、何度も重ねていくうちにすんなり書けるようになり、自分の中で授業後に学びを振り返ることで記憶に残りやすくなることを実感しました。これは、この授業だけでなく、全ての場面で使えることだと思います。

・インクルーシブ教育については、障がいのある子どもや、外国にルーツのある子どもたち、性的多様性について学ぶことを通して、サポートをするために何ができるのか、どのようなアプローチを行えばいいのかについて学ぶことができたように思います。

以上の結果から、本授業は学生にとってよい経験となったことが伺われる。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

オンライン授業の際、視聴覚教材をとりいれたり、グループディスカッションをとりいれたりすることで、緩急をつけることが効果的だった。

講義の途中にチャットボックスや Google Form を用いてクイズに答えさせたり、毎回の授業内容に関するコメントを Google Form に記入させることで、オンライン講義でも学生の積極的な取り組みを促すことができました。また、5月中旬には各受講者が近隣の社会教育施設のケーススタディーを行い、ミニレポートにまとめる課題に取り組ませて、教員がフィードバックを行い、最終レポートの作成に活かせるようにしたことも、効果的でした。

運営方法は、オンラインでも参加型の話し合いやグループ討議を重視したことは功を奏した。反転授業、すなわち課題を事前に出して、討議の時間を十分に避けるようにすることは重要である。また、大きな問いを提示することによって、学びの共同体が生まれることも実感できた授業であった。また、グループ討議を楽しみにしている学生の多さは予想以上であった。

当該授業においては、毎年、具体的な事例や資料を基にしたグループディスカッションや実践的な演習（課題）等、学生自身の主体的な参加や対話の機会を多く設けるように努めていますが、今年度の学生の授業評価における自由記述においても、そうした機会があることによって授業へ主体的に参加できたり、学びが深まったという声が見受けられ、一定の効果があるように思われました。

また、Google ドライブを通じて、授業資料を、毎回、必ず授業前日までにアップロードするようにしていましたが、それにより事前に目を通して授業に参加することができたという学生の声もあり、授業前の資料配信が学生の主体的な参加を促す一助となることもうかがわれました。

①で述べた通り、例えば、グループディスカッションや意見の共有、教員からの反応（コメント）、動画の雰囲気づくりなどを通して、授業を受けたという「手ごたえ」を得られれば、学生は、その授業に積極的になってくれると思われる。

テキストを使用したか、そこに示されていない関連情報を具体的に授業で提示することにした。

「授業に対する調査」の Q10 への回答（自由記述）より、リアルタイムでの説明や簡単な実験、ビデオ視聴、毎回のリアクション課題とそれに対するフィードバックなどが効果的と思われる。

受講生とのコミュニケーションのチャンネルを複数、設けることが効果的と思われます。受講生のコメントが、授業の深化に「貢献している」「影響している」と感じさせることが重要ではないでしょうか。「自分がいてもいなくても一緒」と受講生に思わせると、受講生の積極性が損なわれると思われます。

2020年度に続き、2年連続のオンライン授業となり、教員も受講生（主に2年次生）もオンライン形式に慣れてきたといえるが、質問や課題へのフィードバックや双方向のインタラクションを含むことで、受講生の注意を惹きつける工夫を重ねていきたい。

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

受講人数が想定より多かったため、学期中に1回しか発表の機会がなかったため、複数回の発表の機会を設ける必要があった。また、質疑応答の時間が十分に取れていなかった。これらを抜本的に解決するには、学生の発表は事前にオンデマンドで複数回行わせ、全員がそれを事前に視聴し、授業では質疑応答、ディスカッションだけを行うことが好ましいと思われる。

オンラインではあったが、グループディスカッションを積極的に取り入れたところ、学生同士のコミュニケーションがはかられたようだった。グループディスカッションのあとに教員の考えも説明するようにした。

* テーマに関する新聞からの情報や、インターネットのサイトの動画の URL を示して視聴してもらうことを通じて学生が自身の生活との関係について実感を持って考えられるきっかけを作ることは学生が主体的に学ぶことに繋がり、効果的に思いました。

* 上述とほぼ同様になりますが、目標としていた臨床の現場のイメージを伝えるため、プライベートに配慮したうえでの臨床現場における代表的な事例の紹介、公開されており、教育に用いるために作られたテーマに関する教材、指定されたネット視聴を行い、これをもとに学生が考えるような形式は、具体的なイメージを掴みやすく効果が大きかったと思われました。

* 以上、コロナ禍の急な授業形態の変更のためのオンライン授業になった際に、オンラインならではの利点を生かしていきたいと思えます。

オンラインだと難しいが、学生自身の考えをアウトプットする機会を少しでも持てるようにできると良いかと思う。

・ 75名のうち9割強が1、2年生であったため、オンライン形式の授業であっても、ほぼ毎回の授業においてグループディスカッションや学期末に向けた実践的なグループ発表の機会を設けたことで、同学年（新入生）同士で議論し合う積極的な学習姿勢を自然と促すことができました。

・ グローバル共生研究所主催の BE*hive 展示との連携授業のため、展示テーマに関連したゲスト講師の招聘は、学生たちにとって多くの刺激を与えるとともに、テーマ内容の深い理解を促すことができました。

・ ロールプレイを伴うディベートや議論は学生たち自身の視点の枠を飛び越え、他者の視点からの考察力を養う手助けとなったように感じました。

・ 毎回の授業でグループワークを取り入れたため、学生たちは、欠席してしまうと仲間に迷惑をかけるといった自覚をもって出席をしていたため、欠席率は非常に低かったです。

・ 1年生にとっては、本授業はゼミのようであったとの評判であったため、今後も少人数形式の講義メリットを大いに活かしていきたいと思えます。

・ 授業テーマとの関連で、途上国の現場や学校現場の様子を視聴覚教材を用いましたが、講義のみでは伝えきれない情景が学生たちにより鮮明に伝わり、また多くの刺激があったように感じました。

・ ロールプレイを伴うディベートや議論は学生たち自身の視点の枠を飛び越え、他者の視点からの考察力を養う手助けとなったように感じました。

③ 学科や大学全体として取り組むべきこと

オンライン授業の課題はやはり評価である。授業によってはレポートではなく試験が適している場合もある。オンライン授業では Google Forms を使い、時間制限等の不正防止の工夫をしながら試験を実施したがやはり限界がある。今後オンライン授業が続く科目であっても、学期末試験のみ対面で実施できるようにするなどの工夫が必要である。

オンライン授業やハイブリッド授業での工夫などについて情報共有できるような場があると助かる。

See (1). Encourage full-time teaching staff to share information and tips on what they do in classrooms. Explore strategies/alternatives to English-language graduation theses – some students do not have the level of skills required.

下にも述べるが、授業調査の回収率を高くするための方策を検討すること。

- ・学科内で教員間、科目ごとの FD 活動があるとよい。
- ・今後、ハイブリッド授業を活用しつづける必要が認められる場合は、全学的な情報共有、効果検証が必要となろう。

- ・多様な英語スキルへの対応を学科で検討する。
- ・オンライン形式の授業を併用した2年間で、学生の心理的な大学離れが加速したように感じる。教員との距離感を縮められるような取り組みが必要に思う。例えば email アドレスだけでなく、以前のように時間を決めたオフィスアワーを提示することも、教員にアプローチしやすくなるのではないか。

昨年度お休みを頂いたため、今年度が初めてのオンライン授業となったが、事前に学科の教員たちからの助言を得ていたおかげで、大きな問題もなくスムーズに進めることができた。今後も学内での情報交換は積極的に行っていきたい。

今年度の授業では、通信トラブルへの対応をどこまで行うべきか、通信トラブルや風邪症状での欠席者への配慮をどの程度すべきか、判断に迷う事例も僅かながら生じた。最終的には授業担当者の判断ということなのだろうが、他の授業との差が生じて不公平にならないようにと思うと、なかなか対応が難しかった。大学全体の方針をより具体的に示してもらえたら助かる。

- ・コロナ後もオンライン授業の利点を活かし、対面授業と組み合わせてカリキュラムを編成すること。この文学史のように知識注入型の講義は、対面よりもオンラインの方が学習効率が高いと感じる。

- ・授業用資料をなるべく電子的に共有し、ペーパーレス化を進める。

- ・コロナ禍後もオンラインが適している授業の種類を見極め、カリキュラムの一部にオンライン授業を取り入れること。

- ・ペーパーレス化のため、授業用資料の紙媒体配布を必要最低限にとどめ、電子文書化を推進すること。

③ 学科や大学全体として取り組むべきこと

この授業は通常1号館2階ないし4階の演習室で実施しているが、パワーポイントをスクリーンに映すための機材が備えられていないため、今回は学生の希望もあって場所を3号館344番教室に変更し、パワーポイントをスクリーンに映してプレゼンテーションを行うことが可能となった。そのため発表者は教壇に立って他の学生と対面する形でプレゼンテーションや質疑応答を行うことができ、その後のディスカッションも活発になったと考えられる。

この学年は1年次にオンライン授業が多かったため、こうした形式でのプレゼンテーションやディスカッションは新鮮な経験であったようで、「こんなにみんなと楽しく学べる授業は初めてだった」「ハイブリッド型の授業はオンラインを選びがちだったが、いつも楽しみに授業に参加できた」「議論が活発で参加する意義が大きく、面白い」「新たな知識を身につけるだけでなく、ディスカッションやプレゼンの力も身についたので非常に勉強になる授業でした」といった感想が寄せられた。

昨年度はコロナ禍の影響でオンライン開催となった授業も多く、少人数の演習形式の授業でスクリーンのある教室を使用することが常に可能であるとは限らないが、演習で対面授業が可能な場合には、パワーポイントをスクリーンないし大型テレビ画面に映して発表とディスカッションを行えるような環境を整えていければと願うものである。

コロナの感染状況など、今後の見通しは不透明な部分が多くありますが、オンライン授業を通して得た経験を各教員や学生から聞き取り、今後の授業に生かしていけるといいと思います。

基礎課程演習は、大学における学びや研究の基礎を学ぶ重要な授業である。レポートの書き方やプレゼンテーションの仕方などについては、共通の教材を作成し、学生に提供してもよいのではないかと。

別の授業ですが、オンライン授業でのテストにおいて、学生2人の解答内容が似通っていたという問題がありました。

コロナ前は、3年生の実習で研究の基本を叩き込むことで、4年生は各自の研究のアドバンス部分の個人指導で済んでいたが、コロナ禍でオンラインになり、3年生の実習における達成度に個人差が大きくなった。もともと優秀な学生はオンラインでも勤勉に意欲的に取り組んでおり、オンラインの利点を生かして学修していたが、中間層以下の学生はオンラインでは手抜きをしたり、よく理解できていなかったりする状態で4年生に上がったため、卒論指導では基本から指導しなければならない学生が少なくなかった。

3年生14名、4年生13名、計27名の指導はもはや教員個人の限界を超えていることが、コロナ禍のオンラインで顕在化した。例年ならば、脱落気味の学生も何とか拾っていたが、現在は脱落した数名に補習をする余裕がなく、全体のレベルを下げざるを得ない状態である。

③ 学科や大学全体として取り組むべきこと

オンライン授業は、受講態度が確認できない、通信の不具合が生じるなどの問題点はあるものの、工夫次第で対面時よりも教育効果を上げることが可能である。アフターコロナも、こうした授業形態は継続できるとよい。

ただ、Classroom や Google フォームは、学生が課題を送信したのに届かない、提出済みの表示にならないといったエラーが発生することがあり（特に参加人数の多い授業で頻発）、そうしたエラーの処理が課題である。

次年度から開始される全学的なデータサイエンス教育、また、人間関係学科で取得を推奨している社会調査士資格などとも連動した本学独自の情報教育カリキュラムの構想が必要と考える。東京女子大学では全学部共有のデータサイエンス副専攻を立ち上げるなど、文系学部においても検討が進んでおり、本学の学生の出口戦略の一つとしても検討していくことが求められると思う。

コロナ禍ゆえに、4日間の集中講義はすべてオンラインとなったが、遠方の企業の方にも参加していただきやすくなったことは利点である。学生同士は、3～4名のグループに分かれていたが、それぞれ大学の各教室に分散して作業をしていたようで、やはりグループワークは対面での作業が必須であった。グループの作業は対面で、企業からの説明や最終プレゼンコンペはオンラインで、というように、両者をうまく組み合わせるとより効果的である。

今後は、他の企業にも対象を広げること、学科の他の分野の教員も参加し、学科全体として盛り上げていくこと、対面が可能になれば、学外研修として合宿形式にすることなどを検討したい。

人関がせっかく4号館に位置しているので、BEhive 展示や講演会を授業に積極的に取り込んで行かれると良いと思う。

・オンライン授業のグッドプラクティスの共有をFDなどで共有できたら良い。

毎回の授業において、Zoom の参加総数を定期的を確認しながら授業を行っていた。その結果としてわかったことは、授業の開始までに Zoom に入っている学生は平均 190 名ほどであり、開始数十分後で 210 名前後の参加であった。その後、Google フォームによる出欠確認を終えると、平均 10 名前後が退出し、そのまま参加しなくなる。オンライン授業およびハイブリッド授業を継続していく上で、厳格な出席管理方法を確立する必要があると考えられる。予算の問題で難しいとは思いますが、可能であればそうした出席管理システムの導入が望ましいと考えられる。

授業の質を維持すること。

教室で受講した者は、非常に積極的でありました。一方、オンライン受講の者（1-2名）は、カメラオフで、マイクの不具合のため、発言がほとんどありません。これから、大学側はオンラインでの受講ルールを明確にし、強化すべきだと思います

③ 学科や大学全体として取り組むべきこと

現代教養学部の実質化および2023年度改革の時期に合わせて、国際交流学科は、2コース制（2018年入学者から）を根本的に見直すべき時に来ている。これは、学科カリキュラム全体について言えることであり、コースごとに見直すのではなく、学科としてコース制を俯瞰的に見直すということである。大学全体としての方向性を踏まえておこないたい。科目総数、各コース限定科目の是非、コース間の包括性の改善（現状では分断されすぎている。例：民法と国際法が相互に選択必修科目になっていない）など、課題が少なからずあることは確かである。

学問への知的な興味を保ってもらうために、聖心で学ぶことを希望する学生の増加と、大学としての偏差値の維持・向上を望む。

現状、履修登録を終えてから、授業期間が始まるスケジュールになっている。第1週からほぼ確実に履修する学生ばかりの環境であるため、実質的な授業時間を確保しやすい。その反面、授業や担当教員を実際に見てから履修するかどうか判断することができず、情報源がシラバスのみとなるため、数回履修してから、想定と違うことに気付くということがあり得る。感染症対策のため、やむを得ない部分もあるが、履修登録前に学生が教員に質問できるような体制を大学として用意することを検討してほしい。

眼精疲労、視力低下・白内障の進行は、多くの教員に起きていると思われるが、実態についての大学からはアンケート調査や、そうした疲労についての配慮・ケアが全くなかった。オンライン授業特有の健康管理を教員に対しては、なされていなかった。これはぜひ実態調査をして、それに対するケアをお願いしたい。

第二外国語を学習する意義について、特に1年生に対して説明する機会を設けた方がよい。ジェネラル・レクチャーなどを利用するのもよい。

ハイブリッド形式で授業を行うに当たって、教室の設備が十分とはいえない面があった。問題があるというほどではなかったが、教室に設置されているマイクやカメラについて、有用性が見直しが適宜必要と思われる。

このクラス用に用意されている予算については、今年などは特に使い途がなく、しかしこれを使わないと、このクラスの学生にとって不利益になるのではないかと心配した。必要な教員が申請できるような書き方でもよいのではないか。また他の教員がどのような使い方をしているのか参考のために知りたい。

ハイブリッド形式で演習を行う場合の設備不足や技術不足が危惧される。来年度はテレビしかない教室で演習を行うことが見込まれるためである。

①でも述べた通り、ひとつのテーマのもと、学際的な知見の最前線に触れるような授業がもっとあってもよい。

③ 学科や大学全体として取り組むべきこと

「教員個人が取り組むこと」と同様、教育現場での教育実践や児童・生徒にかかる具体的なイメージを持たせることが課題であると考えられる。学生が教育実践や子供にかかる具体的なイメージを持つことで、理論の理解促進や意義の確認、学習意欲の向上につながることを期待される。そのために、コロナ禍にあり困難を伴うと思われるが、可能な範囲で、学科として、学校ボランティア、半日・一日体験実習等を通した直接的体験の充実、映像や写真や現職教員の話等を通した間接的体験の充実、模擬授業やケースメソッド等を活用した模擬的体験の充実等を今後、さらに検討していくことも必要なのかもしれない。

電子黒板や、プロジェクタ、現物投影のしやすいホワイトボードシステムなどの教具に慣れ親しんで、小中高と学んできた学生が増えてきていることを近年、特に感じている。昔ながらの黒板にチョークで板書すること自体、今までほとんど経験していなかったという学生もいる。本学（大学）よりも初等中等教育の学校現場の方が、環境整備がなされてきているため、特に、教員養成課程における ICT 環境等については、大学として計画的に改善する必要があるように感じる。

私は自宅の Wi-Fi が不安定になることが多く、雑音も入りやすいため、大学の自分の研究室からオンライン講義を行うことが多かったのですが、研究室も付近の部屋からの雑音が入ることがありました。学生の中には雑音が気になる人もいたので気を使いました。今後もオンライン講義が継続される場合、雑音が遮断されるスタジオや研究室環境の整備を行い使い勝手もよくすることが望まれます。

オンラインに関してであるが、学習において「誰も取り残されない」ように、学内の Wi-fi 整備や、場合によっては貸し出しのルータ等、もしくは講習も用意されるとなるとお良いと思われる。一部の学生ではあるが、電磁波自体に抵抗感がある学生がいるかもしれない、と思われた時もあった（確証はないのですが、もしそうだとすれば、取り残されてしまう学生がいるということになり、とても気になっています）。

他の授業でどのような内容が扱われているのか、内容的な重なりがないのか、よく分からずに迷うことがある。仮に内容的な重なりがあるのであれば、自分の授業では扱わずに「〇〇先生の授業で習ったと思うけど」で済ませて効率化を図ることもできるし、あるいは授業同士の内容的な関連性も示すことができ、学生の知識や思考の体系化にも寄与できるだろうと思われる。

同一タイトル科目のシラバスのモデルの提示

引き続き、安定した無線ネットワーク環境の維持をお願いしたい。

対面授業を可能にできるよう、方策を練るべきと思います。新型コロナのクラスターを恐れるならば、学生に対し、週1度の PCR 検査を実施できるようにするなどすればよいのではないのでしょうか。

③ 学科や大学全体として取り組むべきこと

普段授業を行っている2号館4階の42（造形室）では、映像資料を提示することが必須となる。そのためのプロジェクター環境が整っていない。前年に作動しなくなったスクリーンについては、年度末に新しいものが設置され問題はないが、設置プロジェクターが輝度、解像度、ともに使用できないため、以前に初等教育学美術の予算で購入した移動式のもので代用していた。ところが、昨年末に回路が壊れてしまい、使用できない状況にある。新年度の予算で修理に出すか、設置式プロジェクター（天井据え置き）が整備されるかどうか、課題。（映写必要時は、教育学科研究室にあるコンピュータを借用して凌いできた。ただし、毎回の授業で貸し出し、返却をすることは困難を伴う。）

【提言1】

* 42教室における設置式プロジェクター（天井据え置き）の整備を行う。また、リモート受講生のための設備（設置式カメラ等）が当初より配備計画の中に入っておらず、個人のラップトップコンピュータ（マックブックエア）を年度当初用いていた。しかし、現代のリモート会議システム（ミーティング）を走らせるパワーがなく、さらに発熱が尋常ではなく、すぐに落ちたりして、使い物にならなかった。よって、新規にマックブックを個人で購入し、システムが落ちる事態だけは、避けられるようにした。

一方、机間巡視しながら、学生作品の映像を共有し、指導助言を同時に行う行為は、かなりの荷重負担である。

【提言2】

* 42教室に容易に教室内を移動できるカメラ中継の機器を設置する。

（ハイブリッド授業のみならず、通常の対面授業においても、成果物（作品等）の共有がリアルタイムの大画面で共有できるので、極めて教育的効果が高いことが見込まれる。）

④ 授業評価についての意見・提言など

オンラインでの実施となり、ペーパーレス化が進んだことは良いことだと思う。ただし回収率が下がってしまうという問題点はあるため、実施方法・タイミングなどは工夫をする必要がありそうだ。

For me, the best evaluation is a mix – discussion, essays, quizzes and presentations.

今回の授業評価アンケートは全体に回収率が低かったと聞く。本授業も、通常の調査が行われなかった昨年を除き毎年行っているが、53%と今までにない低さだった。しかし、自由記述欄の回答が今までになく多かったことが注目に値する。これまでは自由記述が非常に少なく、学生の考えていることがあまり具体的にはわからなかった。対面授業時間の最後に行くより、Google Form を用いる方が時間的余裕があるためであろう。Google Form の使用自体は良いと考えられるので、いかに回収率を上げるかを考える必要がある。

・今回は Google フォームを利用して授業内で説明し、授業の2日後に締め切りを設けて行った。少人数の演習クラスで説明時に全員出席していたにもかかわらず、1名未提出者があった（紙ベースの場合は、授業時間内に行っていたためか、少人数の演習クラスでの未提出者は欠席者以外なかった）。今後に向けて、実施方法、実施時期、周知方法について検討が必要であろう。

・Google フォームで行うことは便利だが、回収率の低下の問題が残る。今回授業開始前に配布し、授業の最初10分程度を記入の時間にあてたため出席者全員が回答したようだが、記入率が例年より低いことに驚いた。

・形式は選択式と自由記述式に分けず、統一した方が良い。

現在の授業報告書の書式はシンプルになり、記入の負担が以前よりも軽くなった。その一方で、授業アンケート結果を反映させる余地が少なくなった。Q4の設問に「アンケート結果」という語を加えてはどうか。

レポートの課題掲示と同時に、評価アンケートのURLを示して協力を依頼したが、登録者数17名のうち回答者6名（35%）であった。やはり授業中に記入させるべきで、こちらが甘かったと言わざるをえない。一般的に以前に比べ、アンケートへの回答率はどんどん下がっているのではないか、珍しい時代は去り、今は色々答えさせられて学生もうんざりしているのだと思う。

授業に関する調査がオンライン式になり、SDGsの一環としてはいいことだと思います。授業報告書が選択式になって書きやすくなったのはたいへんありがたいです。

報告したことが、全学としてどのように活用されているのか、知りたい。

記入方式が変わり、集計によって他の授業との比較が容易になったと考えられる。また、授業内容と学生からの評価の関連についても分析が可能になったことから、FD活動にもつなげていって欲しい。

④ 授業評価についての意見・提言など

「授業に関する調査」についてフォームへの回答としてから回答者が減っていないか気になっています。

満足度が高かったですので、特にありません。

このような授業評価とりわけ Q4 への回答が、報告後にどのように伝えられ、取りまとめられ、出された意見や提言がどこで有用になり、改善に生かされるのかを、知りたい。

今年は、試験直前の授業ではやることが多くアンケートを授業内に実施できなかったため、Classroom に掲示し有志が答えたアンケートとなった。教務課の希望通りには実施できなかった。来年につなげたい。

アンケートの質問内容は、授業改善により参考になる方向への改良も可能かもしれない。

授業評価では、概ね分かりやすかった、国際問題に関心を持つきっかけになったという意見が多かった。また、授業の冒頭で、レスポンスシートで出された質問への回答や前回の復習を行うことについては、評価するという意見が多かったので、次年度以降も継続したい。

内容を詰め込み過ぎ、もう少し余裕がほしいとの意見について、科目の特性上、限られた時間の中で幅広い問題を扱わなければならないため、やむを得ない部分はあるものの、他の開講科目にも目を配って、重複部分を整理する等の工夫をしたい。

オンラインによる授業評価アンケートは、教室で実施する場合と比較して、学生が時間に余裕を持って、落ち着いて記入できるため、対面授業に戻った後も継続してほしい。

この報告書も回答後にそれがどう活用されているかを実感できるようになると意義を感じられるように思う。

この書式の最初のほうにある「所属学科」を選ぶ欄について、「基礎課程演習」は、私の所属している「哲学科」なのか。また、もっと上に「所属学科・専攻」とあることとの違いはなにか。

・毎回感じることであるが、この評価は教員個々の授業改善には役立っていると感じる一方で、大学全体のカリキュラム改善にどのように反映されているのかが見えにくい感がある。

授業評価（「授業に関する調査」）自体は、これで良いと思われる。ペーパーレス化は大賛成である。一方、授業評価以外にも、本授業独自にワークシートの一箇所に学生の授業に対する感想・意見・要望を書いてもらうことを行っており、今後も学生の声への配慮を怠らないように意識したい。とはいえ、見えない要望・届きにくい声があることも想定される。そのような声をどのように把握するかが、今後の課題である。

また、すでにご検討なさっていることと思われるが、授業報告書もペーパーレス化（印刷しない）を推進しても問題はないと考える。

授業時間中に、学生に授業評価をしてもらう時間を十分に確保できなかったため、回収率が63%と低かったことが反省点である。しかし、自由記述欄など、丁寧に学生からのフィードバックがあり、大変参考になった。

④ 授業評価についての意見・提言など

人数が多い全面オンライン授業では今年度の授業評価形式は有効でしたが、ハイブリッドで行っていた他の授業では、授業の事前準備や出欠確認などに時間を取られるため、授業時間内で授業評価の時間をとることはできませんでした。

授業評価は多角的・多面的な観点から実施されるのであれば、過度な負担にならない限り、有効だと思われる。ただし、基本は自己評価であるのが望ましい。

自由記述の形式での設問の数を減らし、評定法を採用して、集計やフィードバックを容易にしてはどうでしょうか？

授業評価で指摘された環境・設備の問題点を放置せず、積極的に改善していくことが望まれる。

学生による授業評価を実施するならば、授業評価をもっと活用すべきと思います。評価の高い授業の取り組みをFDで紹介する、あるいは評価の高い授業の教員を顕彰するなどすればよいのではないのでしょうか。授業評価を活かして授業の質を向上させる、これが授業評価の目的のはずです。学生による授業評価を、学生へ還元するための仕組みが現状、上手く機能しているとは思えません。

Q10に代表されるように、授業評価のアンケートが比較的前向きな質問の仕方をしているので、これからの自身の授業のあり方を建設的に考えることができるかと思う。

⑤ その他

毎年英語科教育法 I は火曜日 1 時間目で適当な教室が不足している。後期は、教育実習に備え模擬授業を繰り返し行うため、小さな教室ではなく、黒板とプロジェクターの両方が使える教室が望ましいとの声が毎年上がっている。

・現在は、前年度に一定数以上の受講生があった科目は、担当者の希望を聴取することなく一律に次年度オンライン、人数制限なしとしている。教室定員 3 分の 2 を維持するために大人数のクラスをオンラインとする工夫であると理解しているが、今後は、大人数のオンライン授業において、授業の質を担保するためにどうすべきかを検討する必要がある。また、担当者の希望を取り入れて、次年度の授業形式、人数制限の有無、曜日時限の移動の有無を決められる方策を検討してもよいと思う。

大学の授業は高度なことを扱うべきだと考える。難しい内容をわかりやすく説明することに意を注ぐのが本来であり、内容のレベルを安易に下げるのは望ましくない。学生にも初回到授業の目的と合わせてそのことを伝えた。配布資料と説明のわかりやすさに留意し、一定程度、実現できたと思われるので、今後もこの方針で取り組んでいきたい。

オンラインでは、学生の受講態度、態勢などのチェックはできない。であれば、対面時以上に、学生に対する信頼を基本にする必要がある。教員として教壇に初めて立った時の気分に近い。対面になった場合、例えば、グループディスカッション等、オンラインの方がやりやすい場合がある（グループメンバーを変えて複数回同一時間内にディスカッションをする、等）。シラバスに記載が無くても、対面をオンラインに切り替えるなどの授業運営の自由度は許容されるべきだろう。

登録者 17 名（1 年生 9 名、2 年生 3 名、3 年生 4 名、4 年生 1 名）中、ほぼ 15 名程度が毎回出席していたにもかかわらず、アンケートに回答したのは、1、2、4 年生各 1 名、3 年生 3 名だった。1 年生の反応を知れなかったのが残念である。このような低率なので、各選択肢への回答比率にはあまり意味がないと思う。どの設問にも 1 名がやや消極的（選択肢 1～3）、残り 5 名は積極的評価（4 から 5）を下している。

自由記述は以下 2 件

「内容にはとても満足でしたが、ノートのスピードが少し早かったのもう少しゆっくりだと授業を聞くことに集中しやすいと感じました」

「授業の進め方や最後にコメントペーパーを用いてのディスカッションを行う点、とても良いと思います」

本講義はオンデマンド型であったため、(1)PP に記載する情報をより丁寧にする、(2)授業内課題の実施頻度を増加する、などを意識して実施した。学生アンケートの結果を踏まえると、とくに(2)は ICT ツールの活用によって大きな効果を発揮していた。そこで(2)については、対面授業でも有効だと思われるので、次年度以降も継続していきたい。

⑤ その他

・授業はライブ配信を基本としたが、講義スライドの説明は録画し、Google Classroom にアップした。学生の欠席や接続不良に備えるために、全部でなくとも授業内容を記録しておくことは重要だと考える。

・インターネットを通じたオンライン授業であることを生かし、インターネット上の動画資料を積極的に用いたり、紹介したりした。動画資料は効果的だが、信頼性や著作権問題に注意する必要がある。

・学生には毎回の授業で Google Classroom を通じてリアクションペーパーを提出させ、全員分をまとめた資料を作成し、次回授業で紹介しながら、コメントや補足・発展の説明を加えた。リアクションペーパーを教員がきちんと見てリプライすることや、他の学生の意見を見たり、自分の意見を他の学生に見られたりする機会をつくることで、学生の意欲が引き出されることがわかった。

ゼミ生を二班に分け、二週に一回、二コマを使って一人 30 分ずつ卒論指導を行った。その週の班員は、前週までに書き進めた論文を、他のゼミ生に送ってそのゼミ生が Peer Reading し、それに基づいて修正したものを事前に提出した。それを教員は事前に読んでコメントをつけて返却し、ゼミ当日にそれらに応じたものを再提出した。これによって、ゼミ生同士で共通理解と、卒論作成のペースづくりが共有され、質の差は残ったが、全員危なげなく卒論を完成することになった。

毎回、講義に関するトピックに関する一週間以内の新聞記事を取り上げ、良く読み込んで感想や質問を記入したものを提出させた。また講義の最後に毎回、講義内容に関する小テストを行い、評価の土台とした。なお毎回の最初に、チェックインと称して、簡潔なフリーのおしゃべり時間を設け、受講者間の交流も図った。

講義の最後に毎回、講義内容に関する小テストを行い、評価の土台とした。なお毎回の最初に、チェックインと称して、簡潔なフリーのおしゃべり時間を設け、受講者間の交流も図った。さらに講義で質問を多く出し、考えさせる工夫を行った。

⑤ その他

各学期の終了後に自身が担当する講義形式の授業について、統計解析を用いて成績に関する分析を行っている。本授業では、「授業中課題」「授業外課題」「レポート」で成績の総点数を算出している。それらを用いて分析し、顕著であった結果として、最終週に欠席した受講生は出席した受講生よりも有意に総点数が低かったことがあげられる（最終週の出欠を取り上げた理由は、最終週のみ明らかに出席者が少なかったからである。通常は90%前後以上であるが、最終週は82.3%の出席率）。このことから、最終週に欠席しがちな学生の底上げが必要ではないかと考えられる。

今回、後期の成績登録期限後に学生から公欠の届け出があった。今回はその公欠の授業回の休みが成績に直結するものでなかったことから成績の修正の必要はなかったが、そうでない場合もあると考えられる。そのため、公欠の連絡などは、成績登録期限に間に合うように連絡をするように学生に通知徹底する必要があると考えられる（もし事務手続きで成績登録期限までに間に合わなかったということであれば、事務から公欠の一報だけでも先にメールで送るなどの対応があるといいと考えられる）。

100分のオンライン授業は負担が大きいと、休憩を入れてほしいとの要望が複数科目において寄せられている。各授業担当者の配慮に委ねるだけでなく、大学としての方針も検討してほしい。

今回、アンケート対象とした2科目は、国際交流学科が現在開講している、グローバル・メディア科目群の中でも、特に入門用のもの＝I (I) と、かなり上級向きのもの（一部、大学院レベル）＝II (II) である。このため、学生評価はかなり別れるのではないかと予想していたが、結果は思ったほどは差がなく、どちらも学生の理解度・満足度もまずまずのレベルにあったようである。

両者の違いは、その内容の高度さ（十全に理解するために必要とする知識レベル）だけでなく、評価対象となる課題の違いにもあり、前者が映像素材を見ての小レポートとグループディスカッションの議事録であったのに対し、後者は、かなり本確定な研究調査レポートであった。この課題の軽重の違いが、ある程度授業評価（特に自由記述欄）に反映されているような印象を持つ。

つまり、学生に評価をさせたのは授業の「最後」であるため、当然、「最終課題」に取り組んでいる状態である。この場合、「授業は分かりやすく、楽しかったが、課題が大変であった」というケースと、「授業はつまらなかったが、課題が楽であった」というケースで、学生による「授業評価」に違いは出ないのだろうか？もちろん、課題も含めての授業評価だ、というのはその通りであるが、学生アンケートを参考にした立場から見れば、＜授業の進め方の評価＞と＜課題のレベル＞は弁別できるようなアンケート項目になっていると、より教員にとっては意義のあるものとなるのではないだろうか。

⑤ その他

昨年度オンラインで授業を行ったが、本年度は登校できない数名を除いて、対面を基本として授業を行った。自由記述の回答から、定期的なグループワークを取り入れたことへの評価が非常に高かった。また、本年度はハイブリッド型（オンラインライブ型）で授業を行ったが、毎回パワーポイントスライドや新聞切り抜き資料などを、Google Drive 上にあげるだけでなく、対面受講生からプリント配布の希望が多く、結果として、どちらも行うこととした。対面受講生はプリント配布により、メモが取りやすかったことをはじめとして、高く評価していた。

また、本授業は教職免許に関係する授業であるが、この授業で学んだことを、教育実習中に、けがをしたり、成長途中で悩んだりした子どもたちに話すことができたという記述もあり、理論面のみならず実践面も強く意識して展開したことがよかったと思われる。

体育授業の模擬授業を行うことで、指導案作成の際に想像していた場面と、実際の模擬授業での実践において学生は思った通りいかないという壁に打つかることが多かったが、それを通して次のように改善していくかを考えていく機会となったことが学生から良かったという意見があった。また、模擬授業は2台のカメラで撮影し、客観的にみて反省することができたことも良かったという意見があった。体育館という特殊の環境の中で、指導内容や方法だけではなく、授業のマネジメントや安全についても強調しながら実施することで、視野を広げて授業全体を見る力を育てることができたと思う。また、模擬授業は、5回実施したが、先生役を担当したいときは、生徒役として参加し、生徒はどのように感じるか、思うかということについても考えてみることもできたことも、次に先生役を担当する際に役に立ったという意見があり、グループワークがそのグループの活動に止まらず、全員に影響を与え、学び合うことができる成果が得られた。

コロナの関係で、体育科の指導内容についてはオンラインで実施し、一方的な講義となってしまったが、今後対面授業が再開したら、指導内容の講義においても、グループ活動や意見交換を多く取り入れていきたい。

今回の自身の授業の自己評価的コメントですが、今回、ブレイクアウトルームを主体としたアクティブラーニングを実施した結果、受講生同士で考えを深めることができてよかった点や、将来、教職につき授業をデザインする際の具体的な方法を学ぶことができたなど高い評価を得ることができた。

第3章 学科・専攻による授業報告書

学生による授業評価の結果をフィードバック後、各教員は自身の授業を振り返り、その成果や課題等を「授業報告書」として提出するが、これらを学科レベルで取りまとめ、学科・専攻コースの授業報告を作成する。以降は各学科の報告である。

英語文化コミュニケーション学科

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

各授業の目標は概ね達成できている。しかし、オンライン授業では、対面授業に比べ、学生の英語力や習熟度を理解することが難しい。また、学年によっては、学生間の英語力に大きな差があり、多様な語学力や理解度に合わせた授業内容や方法の工夫が必要となっている。

授業形式（オンライン・対面）を問わず、丁寧なフィードバックを行ったり、対面は勿論、email、チャット機能、Google フォームなど質問をしやすい方法を複数設けたりすることで、双方向性の確保に努めたことは、学生の意欲的な取り組みや理解力の向上に繋がっている。その一方で、今年度は感染症対策のため大人数の授業がオンライン形式となったことで、学生同士がお互いの理解度をチェックしたり、協力して作業をすることが難しくなっている。これまでは授業前後のちょっとした会話が不安の解消や親交を深めることに繋がっていたが、このような機会が減少していることがコロナ禍の授業展開の課題の1つとなっている。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

(他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください)

協働の促進や考えの共有、理解を深める助けになっている方法として挙げられたものを紹介する。対面授業を再開し、オンライン授業展開2年目となった今年度は、ツールの組み合わせが効果をあげている。

- プレゼンテーションや応用実技の活用
 - ・プレゼンテーションをしたテーマや文献について、学生自らが考えたディスカッショントピックを提示し、クラス全体で討議する。
 - ・翻訳の授業で、学習内容の応用と学生の協働を養うために翻訳実技を取り入れる。
- オンラインツールを用いたディスカッション
授業時間外で Google Classroom の質問機能を用いディスカッションや振り返りを行う。
- オンライン授業での発言しやすい環境づくり
リアルタイム型オンライン授業において、チャットや Google フォームを用いて質問や

「気づき」を発言しやすくする。

- フィードバックや質問の共有
 - ・リフレクションペーパーを1つにまとめ、ドライブで共有したり、優れた物を授業の中で紹介する。
 - ・継続して全員で取り組む課題への講評と実践例の紹介を授業中に行う。
 - ・寄せられた質問やコメントに関して、次の授業の冒頭で答えたり説明を加えたりする。
- マルチモーダルな学びの促進
 - ・グループワークとして、短編作品を視覚化する。
 - ・ビデオやウェブサイト、写真などを data pool として共有し、互いにアイデアを得たり、協働に役立てる。
- 復習の円滑化
授業のビデオ（オンデマンドビデオ、リアルタイム授業の録画）をドライブで共有し、個々の復習に活用させる。
- 協働や連帯感を促進するスペース作り
 - ・教室のレイアウトやスピーカフォンの位置を工夫し、ハイブリッド授業でも、お互いの顔を見て意見交換をしやすい空間を作る。
 - ・グループやペアワークのメンバーを固定しない。
- 学びへの誘導
 - ・英語への苦手意識を取り除くべく、身近なテーマや楽しんで学べるような題材を用いる。
 - ・難しいテーマを扱う際、導入の説明に時間をかけたり、身近な例を出して説明する。
- その他
 - ・ライティングの授業で漫画のナレーションをすと言った方向性の違う教材を取り入れることで、メリハリのある学習環境を作る。
 - ・対面授業であっても集中力持続のために休憩をはさむ。

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

教員間の情報共有や自発的な FD 活動が必要と思われる。特に全学共通科目など、複数教員が同一科目を担当している場合、クラス間で評価や授業運営等の差をなくすような調整をする必要がある。その一方で、学生には同一科目であっても色々なタイプの教員がいることは理解して欲しい点である。

高学年の演習科目などでも、各教員の専門性を活かす教育を提供する中で、学科の掲げる DP に適うべく達成目標や共通の指標（例えば卒業論文執筆に向けて身に着けるべきスキル）を確認する機会を持つことも、教育の質保証には有効だろう。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

感染症対策として、今後も大学が対面授業にハイブリッド授業を活用する場合、設備面の充実だけでなく、科目の特性による効果も考慮してほしい。授業目標の達成のためには、様々なアクティビティを含むことがデフォルトとなる語学や、アクティブラーニングを効果的に行うには、教室に設置されたカメラとスピーカフォンだけでは不十分である。今年度はそれぞれの教員が試行錯誤し、工夫を重ねてきたが、学生の成績評価や授業満足度に直結する要素であり、大学として現状把握と教育効果の検証をしてほしい。また質保証の観点からも、全学的な情報共有が望まれる。

現在は感染症対策のために、教室定員の制限や大人数クラスのオンライン開講（人数制限なし）を行っているが、今後は授業の質担保のために、教員の希望による授業形式や人数制限有無の選択、時間割編成などを取り入れる検討をしても良いのではないか。

5. 授業評価に関する感想、要望

今回の授業評価は Google フォームを利用して行われた。ペーパーレス化や、学生が時間をかけて回答できる利点がある反面、回収率の低下が目立った。授業評価の実施時期や方法、周知方法について、検討した方が良い。

また、自由記述欄の記入率がこれまでより上がった授業と下がった授業の両方があり、フォームの設問の見直しも行った方が良いかもしれない。

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

- ・学科教員から提出された授業報告書は7件、そのすべてが「オンライン」での「講義」に関するものだった。よりよいオンライン授業をめざす教員の意識が窺える。
- ・授業の目標達成度についての回答は、「達成できた」が3件、「ある程度達成できた」が4件だった。学生の取り組みを促す授業の工夫についての記述も多かった。以上から、教員が授業に熱心に取り組む、その成果が挙げられたことが窺える。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

(他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください)

(1) 授業実施形態の工夫

- ・オンデマンド型（課題を提示して解答を提出させる）と、リアルタイム型（課題に取り組む前の解説、前回課題のフィードバック、ブレイクアウト機能を用いたグループディスカッション等を行う）を組み合わせたオンライン授業。学生から、課題にじっくり取り組むことができる、授業が理解しやすい、等の反応が多かった。

(2) オンライン授業で双方向性を確保するための工夫

- ・チャット機能や投票機能等を使い、学生から意見や例を挙げてもらった。
- ・授業内課題の解答結果をリアルタイムで共有してフィードバックを行った。他の学生と間接的ながらも触れ合うことで刺激を受けたようである。
- ・リアクションペーパー（Google フォーム）に、学生が授業でわからなかったことや自分で考えたことを書くように指示し、翌週の授業の冒頭でコメントしながら紹介した。
- ・リアクションペーパーの内容を抜粋し、教員のコメントとともにプリントにまとめて配布した。学生にとって疑問点や理解不足の箇所への補足となり、モチベーションアップにも繋がったようである。

(3) レジュメなど配付資料の工夫

- ・オンライン授業ではこれまで以上にレジュメを工夫した。従来口頭や板書で説明してきた語注や系図をあらかじめレジュメに掲載しておく、トピック毎に細かく小見出しをつけて切れ目を明示するなど。ただし、一部を穴埋め形式にして「授業を聞かないとレジュメが完成しない」という状態にすることで、学生の積極的な参加を促した。

(4) 単調な授業にしない工夫

- ・講義が単調・受身にならないよう、クイズやグループディスカッションを組み込んで変化をつけた。
- ・配布レジュメを画面共有して口頭で解説を加えるほか、適宜パワーポイントを用いて表や画像も示すことで、視覚的に理解を深めることをめざした。
- ・授業開始時やトピックの変わり目にチャイム音等の効果音を使用し、授業にメリハリを付けた。

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

・学科内 FD 研修の継続

2020 年度より、ITC ツールの活用法など、オンライン授業やハイブリッド授業に必要な技術や知識について、学科内で随時 FD 研修を行ってきた。これがコロナ下における授業の質向上につながったと考える。(2021 年度に産休から復帰し、初めてオンライン授業を行った教員からも FD 研修が助けになったとの声がある。) 今後も、大学の授業実施形態の変化に合わせてこの研修を継続するとともに、あわせて学生に関する情報共有を教員間で密に行い、個々の学生に即応したきめ細かな指導・支援を行っていききたい。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと (意見、提言など)

(1) オンライン授業下の学生対応の公平性について、次の意見があった。

- ・学生側の通信トラブルへの対応をどこまで行うべきか、通信トラブルや風邪症状での欠席者への配慮をどの程度すべきか、判断に迷う事例が生じた。最終的には授業担当者の判断ということなのだろうが、他の授業との間で不公平にならないようにと思うと、対応が難しかった。大学全体の方針をより具体的に示してもらえたら助かる。

(2) アフターコロナを見据えて、次の意見・提言があった。

- ・コロナ収束後もオンライン授業の利点を活かし、対面授業とオンライン授業を組み合わせるカリキュラムを編成することが望ましい。例えば文学史のような知識注入型の講義は、対面よりもオンラインの方が学習効率が高いと実感する。
- ・対面であっても、例えばグループディスカッションなど、オンラインの方がやりやすい場合がある(同一時間内にグループメンバーを変えて複数回ディスカッションをする、等)。シラバスに記載していなくても、対面授業を一時的にオンラインに切り替えるなど、授業運営上の自由度が許容されるべきだろう。
- ・対面授業に戻っても、ペーパーレス化のため、授業用資料の紙媒体配布を必要最低限にとどめ、電子文書化を推進することが望ましい。

5. 授業評価に関する感想、要望

- ・現在の授業報告書の書式はシンプルになり、記入の負担が以前よりも軽くなった。一方で、授業アンケート結果を反映させる余地が少なくなった。Q4 の自由記述欄の設問①～⑤の中に「アンケート結果」に関する項目を加えてはどうだろうか。

史学科

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

・史学科の授業報告書によれば、授業の目標はいずれも「ある程度達成できた」、ないしは「達成できた」とされており、授業の目標がおおむね達成できたことがうかがえます。

・授業の目標がおおむね達成できたことからわかるように、学生の取り組みも、教員から見ればおおむね満足できるものでした。その一方、コロナ禍で学生が課題に追われており、とくにあまり器用ではない学生は一つ一つの授業に集中できていない様子が見られました。そのような場合には、予習と復習の量を加減して、授業内にしっかり学習してもらうというように、臨機応変に対応して授業運営をする必要があると考えられます。これまでも、学生の取り組みについて、教員間で情報を交換してきましたが、オンライン授業やハイブリッド授業の多い期間は一層こまめに情報を共有する必要があると考えます。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

(他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください)

・毎回、授業内容に関する質問・感想・要約を提出させ、質問や誤解に対しては毎週 Q&A を作成し、配布することで正しい理解を促し、勉学意欲の維持・向上に努めました。

・ICT ツールを活用して授業内課題を頻繁に実施することで、学生の理解が促されました。

・オンライン授業で板書のかわりにチャットを活用することで、学生の集中を高めました。

・チャットにコメントや質問を書き込んでもらい、その中のいくつかは音声でも述べてもらって、その場で教員が答えるという形式をとることで、オンライン授業でも学生と教員とのやりとりを活発にすることができました。

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

・授業報告書からは、学生と教員の双方が、オンライン授業やハイブリッド形式の授業、対面形式の授業の混在している状況の中で、苦労と工夫を重ねている様子がうかがえました。たとえば、多くの授業をオンライン形式で受講してきた学生は、対面のプレゼンテーションに不慣れであったり、教員はオンデマンドのオンライン授業の教材の準備に多くの労力と時間を使わざるをえなかつたりしていました。また、オンライン形式の授業が多いため、大学生活になじめない学生も散見されました。来年度は対面形式の授業が増える見込みですが、オンラインでしか受講できない学生も一定数はいるものと考えられますので、このような状況に学科としても継続して対応していく必要があると考えられます。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

・オンライン授業のテストにおいて、同じ場所から複数名で受講することになると思われる

学生（姉妹など）については、どのように公平性を担保するのかという課題が提起されました。大学から指針を示していただけるとありがたいです。

- ・基礎課程演習は、大学における学びや研究の基礎を学ぶ重要な授業ですので、レポートの書き方やプレゼンテーションの仕方などについては、共通の教材を作成し、学生に提供してもよいのではないかという意見が出ました。

- ・演習の授業の活発化のため、パワーポイントをスクリーンないし大型テレビ画面に映して、発表とディスカッションを行えるような環境を整えていただきたいと思います。

5. 授業評価に関する感想、要望

- ・オンラインによる授業評価を続けてほしいという教員の声が複数ありました。その一方、多くの科目で同じような授業評価アンケートに答えることになる学生たちは、オンラインだと回答をしないで済ませてしまう傾向が高く、回答率が低いという問題が指摘されました。

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

オンライン授業 2 年目となり、学科や教員側もスキルが上がったこと、オンライン特有のトラブルとその対応のノウハウが蓄積されてきたことで、混乱が多かった 2020 年度に比して教育の質は向上した。

これに伴い、オンラインが有益な授業の形式も明確になってきた。講義科目においては、工夫次第で双方向コミュニケーションや学生参加型が可能となり、対面よりも高い教育効果を上げることができる。卒論指導のような個人面談においては、教員と学生がお互いに場所を選ばないことから、むしろコロナ前よりもきめ細やかで効率的な指導が可能になった。

一方、演習・実習やグループワークは、学生同士の関係性の構築や、進捗状況に合わせた指導という点で、対面が適している。対面を原則として、時間外の作業や、ファイルを共有しながらのディスカッション、遠方のインフォーマントや企業とのコンタクトなどの場面でオンラインを併用すると、より効果的である。アフターコロナも、すべてをコロナ前に戻して一律に対面授業とするのではなく、オンライン授業の利点は生かしていけるとよい。

しかし、オンライン授業の限界も見えてきた。2020 年度は手探りで全授業をオンラインに作り替える中で、IT 機器に不足のある学生も不利にならないよう、不正や怠慢の統制よりも、学修の権利を確保することを優先してきたが、今年度は、不正や怠慢の側面が顕在化し、看過できない事態となりつつある。特に出席管理 (Zoom や Meet のログイン、オンデマンド動画視聴のチェックを含む)、オンラインでの試験実施等においては、難題が多い。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

(他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください)

- ・チャットによるリアルタイムのやりとり
- ・Google フォームを活用した授業内課題、その結果を授業中に発表して理解を促進
- ・小グループに分けてディスカッションの時間をとる

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

学科の学びの特徴として、社会調査士取得をより強化していきたい。学科必修が多いことが社会調査士資格の取得を抑制していることから、カリキュラムの見直しも視野に入れている。また、研究倫理の厳格化を受けて、卒論評価の基準も学科の内規として策定する予定である。

一方で、学生の中には統計学に対する苦手意識があり、社会調査士取得の抑制要因ともなっている。単なる基礎知識としての統計学ではなく、それを活用した具体例のおもしろさをアピールすることで、モチベーションの向上につなげたい。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

もともと S T 比が高く、1 ゼミあたりの人数が多いことから、学生指導には苦労が多かった。社会調査士のカリキュラムを体系化、実習などのグループワークで指導を徹底することが大人数の指導を可能にしてきたが、コロナ禍で実習が例年通りに運用できなくなったことで、基礎的なスキルの習得に差が拡大し、卒論の達成度にも差が大きかった。人数の多さから学期中にゼミ生全員の指導が終わらないため、夏休みや春休みにも学生指導に時間をとられる。S T 比の調整を要望したい。

Classroom や Zoom のシステム上のエラー、公認欠席の連絡期限等、オンライン授業の事務的なトラブル整備についても、対策が整うことが望ましい。

オンライン授業の工夫やグッドプラクティスを、教員の F D として共有できたらよい。

2023 年度からデータ・サイエンスが必修化するが、もともと統計学に苦手意識を持つ学生が多いことを踏まえると、挫折しても何度でもやり直せるという安心感、きめ細かな補習制度などが求められる。

5. 授業評価に関する感想、要望

他の授業との比較、授業内容と学生からの評価の関連分析等を、F D として活用できるとよい。

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

教員、学生共にオンライン形式への適応が進んだが同時にさまざまな課題も見えてきた。包括的に所見を述べることは難しい。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

(他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください)

オンライン授業で事前の予習シートの配布、事後のレスポンスシート（Google Forms）記入によって受講生の積極性が増した。

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

現代教養学部の実質化および 2023 年度改革の時期に合わせて、国際交流学科は 2 コース制（2018 年入学者から）を根本的に見直すべき時に来ている。学科カリキュラム全体について言えることであり、コースごとに見直すのではなく、学科としてコース制を俯瞰的に見直すということである。大学全体としての方向性を踏まえておこないたい。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

第二外国語学習の意義についての啓発。

オンライン授業特有の健康管理についての実態調査とケア。

100 分のオンライン授業は負担が大きいため、休憩を入れてほしいとの要望が複数科目において寄せられている。各授業担当者の配慮に委ねるだけでなく、大学としての方針も検討してほしい。

現状、履修登録を終えてから、授業期間が始まるスケジュールになっている。履修登録前に学生が教員に質問できるような体制を大学として用意することを検討してほしい。

5. 授業評価に関する感想、要望

オンラインによる授業評価アンケートは、教室で実施する場合と比較して、学生が時間に余裕を持って、落ち着いて記入できるため、対面授業に戻った後も継続してほしい。

このような授業評価とりわけ Q4 への回答が、報告後にどのように伝えられ、取りまとめられ、出された意見や提言がどこで有用になり、改善に生かされるのかを、知りたい。アンケートの質問内容は、授業改善により参考になる方向への改良も可能かもしれない。

哲学科

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

今年度も学科の授業の多くはオンラインであったが、教員側としては2年目ということもあって、授業の内容や方法に工夫が見られた。学生の方も、大部分は方法に習熟が見られたが、オンライン環境に馴染めず、授業への意欲が持てなかったり、欠席がちだった場合があった。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

(他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください)

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

学科としては、2年次生の基礎教育、特に論文執筆能力の向上に取り組むことが急務であると考ええる。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

○オンライン、ないしハイブリッド授業を今後もどこまで取り入れていくかについて検討をすすめてほしい。オンラインか対面かという単純な二者択一ではなく、学生を教室に拘束しない授業の可能性は色々ある。もちろん、その場合、学生の達成をどのように評価するかという問題はあるが、教室にいれば達成が担保できるというわけでもない。そもそも週45時間労働という時間をベースにした単位制度が時代遅れである。労働においても、フレックス、裁量労働制、出来高制などがあるように、授業についても見直す余地があるのではないか。

○Sophie と Google Classroom の使い分けについて整理をしてほしい。

5. 授業評価に関する感想、要望

○授業報告書の様式で、個人の学科・コース所属を書かせた上で、授業について「所属学科」を選ばせる意味がわかりにくい。後者は、授業の開講学科の意味だろうが、専攻課程において他学科の授業を担当することはほぼないため、意味がない。基礎課程科目や全学共通科目を対象にしてもよいはずなので、それを項目立てしたらどうか。

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

今年度のコロナ禍状況においても、例年のように多くの学生が熱心に授業に参加している。が、対面授業に出席できない少数の学生がいた。心理的負荷による影響は少なくはないことが推測できる。授業目標達成以上に、教員一人一人がその方面へ心を砕いていたことが印象的である。授業目標そのものは、教員の授業への工夫によって、ほぼ達成できているといえようが、学科、大学のさらなる包容力ある教育の場が機能することが望まれる。

従来より、本学科専攻ではいくつかの特色ある授業実践を展開してきた。その一例として、主に1年次生を対象にした「教育学入門」がある。この授業では教育学へいざなうオムニバス式で開講している。学科の全教員が授業を1回ずつ持ち、各々の教員の専門性が生かされる内容となっている。教育学科を志望する学生の多くはこの授業を履修し、教育への関心を深めることに役立っている。今までは大教室で行われ、私語が多いことが指摘されていたが、近年では、毎回のフィードバックの方法に工夫がなされ、また、コロナウイルスの蔓延状況下から開始されたオンデマンド中心のリモート学習方式の成果（結果）でもあるが、その課題に関しては解消されている。

また、「人間学習」と称する独自の科目群も設置している。名称が示唆するとおり、深い人間理解を目標とし、体験学習やホリスティック教育ならびに国際理解教育等を核とし、教職を目指す学生も含めて資質向上をはかってきた。近年のアクティブ・ラーニングを体系的な学科の伝統として位置付けているという見方もでき、積極的な態度が履修生一般に見られることからしても、参加型学習の重要性を長年にわたり証明してきたと言える。ただし、この直接体験型の授業群においては、リモート期間中の成果に当然のことではあるがばらつきがあり、今後のコロナの感染状況を見据えた上で、各担当教員の一層の工夫が必要である。

初等教育学専攻では、近年の学生および外的なニーズに応え、就学前教育関連のカリキュラムの充実化をはかってきた。実技と講義を組み合わせる学び、創造的な表現を身体・造形・音楽の各観点から捉えて発表する体系が定着し、学生の満足度にも繋がっていると言えよう。また保育や体育の領域が専門の専任教員が充実している現在、他施設やマーガレット・ルーム等との連携により、有機的に研究と実践とを往還するような就学前教育をより発展させていくポテンシャルも高まっている。

一方、教育学専攻対象の「自主プロジェクト研究（My プロジェクト）」は3年次生を対象に、2006年度から開講している教育学専攻独自の授業である。この授業は、教員免許の取得が必須の初等教育学専攻に比して、学習目的が焦点化されにくい教育学専攻生にとって学びを深める上で大きな動機付けになっており、一連の学びを通して卒論テーマと出会う学生も少なくない。成果を発表する機会としてはポスターセッションを聖心祭の時に設けており、自主的な学生の学びの場となってきた。この2年間は、コロナウイルスの感染状況を踏まえ、聖心祭での発表はリモート会議システムを用いて行われている。実地のフィールドワークに赴けないという状況はあるが、データベース等を用いたデスクワークでは、受講学生たちの学びが保障されていたと判断できる。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

(他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください)

全教員が、アクティブラーニングを基本としている。例えば、オンライン授業によって希薄な人間関係となりがちであることから、グループディスカッション等のグループワークを通して、人間関係の構築に務めたりするなどの工夫や、予習課題として資料を読みこなし、事前に「感じたこと、考えたこと」などをワークシートに記しておくなどして、討議の時間を十分に確保するなどの反転型授業導入の報告が複数あった。さらに、学生の積極的な取り組みを促すために、講義の途中にチャットボックスや Google Form を用いてクイズに答えたり、毎回の授業内容に関するコメントを Google Form に記入させることで、オンライン講義でも学生の積極的な取り組みを構想する教員もいた。

ただし、オンライン授業の限界と、対面授業との差異など、多くの教員からの対立的な指摘があったことも事実である。

リアルタイムのオンライン受講については、活発に話し合いが行われていたかどうかを十分に把握することができず、理解度に差が出てしまったのではないかとの意見があった。また、ハイブリッド型の授業においては、実習やミニレポート作成作業など、公平性を期するための指示や仕組みが複雑となり、改善の必要があるとの指摘があった。

一方、Google ドライブを通じて、授業資料を、毎回、必ず授業前日までにアップロードすることで、「事前に目を通して授業に参加することができた」という学生の肯定的な声を挙げ、授業前の資料配信が学生の主体的な参加を促す一助となるという指摘もあった。また、毎回資料をドライブに上げるだけでなく、対面の学生からはプリント配布の希望が多く出されていたとの報告や、授業用資料の配布、講義録画へのアクセスや学生のレポート提出に、Google Classroom の利便性を挙げる教員もいた。さらに、多人数のオンライン授業の中で、zoom のブレイクアウトセッションを活用して、「問い」を投げかけグループで意見交換する時間を設けた教員もいた。学生からは「この時間が面白かった、異なる意見を交わすことができてよかった、もっとやりたかった」という意見と「対話が盛り上がりず、長すぎると感じた」という意見が出て、評価が分かれたという。担当教員は、「対面授業であれば、学生の間を巡回して、盛り上がりの無いグループには何らかの支援ができるのだが、zoom だとそれが出来ず、ブレイクアウトルーム一つ一つに入っていくには限界があり、難しい」と感じている。しかしながら、ブレイクアウトルームを主体としたアクティブラーニングを実施した結果、受講生同士で考えを深めることができたといい意見が多いことも事実である。

オンデマンド動画配信による講義では、「分かりにくかった箇所や忘れてしまった箇所を何回も聞き直して復習できて学習効果が高かった、別の授業や用事があったとしても忙しいときなどに自分なりのペースで学習を進めることができたなど、意外に好意的な意見が多かった。」との報告があった。さらに「例えば、思考の前提となる知識を授受すべき学習段階など、授業内容や学生の学習段階によっては、オンデマンド動画配信もかなり学習効果が高い授業方法であるとの指摘がある。ただし、単なる一方的な動画配信だけではなく、例えば毎回のコメントペーパーに対する授業担当者の反応(コメント)があることなどとセットで考える必要がある」と付帯が述べられていた。また、「オンデマンド配信動画を作成する際にも、学生たちに自然に呼びかけるようリアルな話し方となるように意識しつつ、学生は、主体的に授業を受けたという「手ごたえ」

がほしいのではないか」と結んでいる。

双方向的な授業方法については、「毎回のコメントペーパーの内容をいつもスプレッドシートにして受講者全員に共有しつつ、代表的な感想や質問には個別に教員のコメントも付すようにして受講者全体へと開示するようにしていた。学期の最後に行ったアンケート調査の結果を見ると、こうした教員 - 学生間および学生 - 学生間の双方向的な授業方法が特に評価されていた印象を受けた。」という指摘があり、ここには開かれた双方向性が重要であることが示唆されている。

ゲストスピーカーの招聘は、オンライン上であっても学生の経験値が豊かになるとの指摘があり、さらに充実した招聘者、時間数の確保が必要である。また、深い人間理解や幅広い教養を持ち合わせた教育者の養成という観点からも、多様な背景を持ったスピーカーの登壇が望まれるところである。例えばある教員は、「保育者としての使命感を高めるために多方面の意見を聞く必要があると考え、現職の保育者や子育て中の父親をゲストスピーカーとして招き、オンライン上ではあるが保育者に求めることは何かについての話を伺った。学生たちは真剣にゲストの話聞き、授業評価においても、ゲストの話がとてもよい学びになったという意見が多かった。」と指摘する。また、自然科学系の知見にも触れてほしいという思いから、ゲスト講師を人選した教員もいる。その回では、来年受講できないにもかかわらず、「来年も是非」という学生からの評価メッセージがあったという。専門家本人の話には迫力と奥深さがあるとその教員は、感じている。その点からも、「ひとつのテーマのもと、学際的な知見の最前線に触れるような授業がもっとあってもよいのではないか。」

教育法の授業では、模擬授業を行なっている教員もいる。体育科教育法担当の教員から「模擬授業を行うことで、指導案作成の際に想像していた場面と、実際の模擬授業での実践において学生は思った通りいかないという壁にぶつかることが多かったが、それを通して次どのように改善していくかを考えていく機会となっている。模擬授業は2台のカメラで撮影し、客観的にみて反省することができたことも良かった」という意見もあった。

授業全般においては、近年の学生の学力低下の問題や知識水準の多様化を把握しながら、学生の興味・関心を引き出す工夫が求められている。卒論指導では、日本語指導が求められるレベルの学生をも想定して、学科独自の『卒業論文の手引き』を毎年、改善・更新し、対応している。今年度のバージョンは、特に大幅な改訂が行われた。授業実施のリモート状況下でありながらも、こうした肌理細やかな指導体制も手伝って本年度も多くの学生が無事に卒業することが適ったことも否定できない。

本年度も、卒論発表会を全ゼミが公開型（対面／リモート）で実施しており、聴講した3年生も少なくない。発表会は、ゼミにもよるが、3年生が本格的に卒論執筆の過程を意識する希少な機会となっている。卒論執筆の技術的な助言を上級生から伝授されるだけでなく、教育採用試験や就職活動と併行して卒論を執筆する際の留意点、生活に困窮している学生はアルバイトとの兼ね合いなど、学生同士の指導助言の貴重な機会として定着している。各ゼミでは様々な工夫をしており、研究方法や執筆に関するルールなど、頻繁に学生間で情報交換をさせて、学生がディスカッションしやすい環境を意識して作り出していくことにより、モチベーションの維持に努めているゼミもある。

一方、そこに至る卒論指導では、リモート環境の中で深夜に及ぶ場合もあり、教員、学生双方の負荷が高まった。このコロナ状況下、指導側、受講側、双方の心理的ストレスや物理的、時間的問題を解消する方策、科学が必要である。

授業以外の場面でいかに学習のモチベーションを高めたり、維持したりする工夫も行なっている。その一つに課題図書がある。2008年から教育学・初等教育学専攻の2年次に進級する学生に対して、春休み中に教育に関する図書3冊を読み、その要約を提出させることとし、教育学の古典から最新の専門書、さらには周辺領域の専門書まで教員推薦図書冊子を教育学専攻・初等教育学専攻の学生全員に配布することになっている。毎年新たな推薦図書を加え、教育研究室の常置用図書としても整備している。これにより、学生が教育学を様々な視点から学ぶ姿勢を培う契機となっている。ただし、このコロナ期間については、これらの周知が例年に比較して徹底できていない側面もある。

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

教育学科の課題として、特に教育実習を視座に「実習校とのコミュニケーション」や「コロナ状況に応じた対応」の問題、「卒論指導と教育実習との期間重複」等のいくつかの課題がある。その他、以下に、今回の報告書に提出された代表的な課題内容を示す。

・教員個人が取り組むことと同様、教育現場での教育実践や児童・生徒にかかる具体的なイメージを持たせることが課題であると考えられる。学生が教育実践や子供にかかる具体的なイメージを持つことで、理論の理解促進や意義の確認、学習意欲の向上につながることを期待される。そのために、コロナ禍にあり困難を伴うと思われるが、可能な範囲で、学科として、学校ボランティア、半日・一日体験実習等を通じた直接的体験の充実、映像や写真や現職教員の話等を通じた間接的体験の充実、模擬授業やケースメソッド等を活用した模擬的体験の充実等を今後、さらに検討していくことも必要なのかもしれない。

・他の授業でどのような内容が扱われているのか、内容的な重なりがないのか、よく分からずに迷うことがある。仮に内容的な重なりがあるのであれば、自分の授業では扱わずに「〇〇先生の授業で習ったと思うけど」で済ませて効率化を図ることもできるし、あるいは授業同士の内容的な関連性も示すことができ、学生の知識や思考の体系化にも寄与できるだろうと思われる。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

一昨年来の指摘内容であるが、講義のみならず、「えんたくん」などの参加型のワークショップ・ツールを活用することは有効である。しかし、40番教室のようなそれを生かせる教室環境は非常に少ないのが現状で、アクティブ・ラーニングを展開する準備ができていないのに、それを生かす環境の整備ができていない。参加型の授業づくりの一環として、PadletやMentimeterなどのデジタルソフトを無料簡易版で使用している教員もいるが、できれば大学全体でそうしたデジタル学習・教授環境を整えていただき、グレードアップしたバージョンで授業の充実化を図れると理想的である（アクティブ・ラーニング拡充のための学内助成なども考えられよう）。

ハードの面での改革は急務であると言えよう。海外の大学で見られるような学習意欲を高める工

夫を図書館等の施設で凝らしていくことは一考に値する（例えば、豪州アデレード大学図書館など）。図書館を静かに読書する空間のみならず、アクティブに学び合い、仲間と学び合う自由闊達な学びの空間として変えていく必要はないだろうか。

施設面での喫緊の課題もある。2号館の教室では、プロジェクター等を使用する場合に、手元近くに教室照明の電源が無いため、大きな教室の場合、映像を教員が何度も横切る形や、映像を見ながら学生が筆記する場合に照明の調節ができないので、映像が映る教室の前方の学生の手元が暗いまま文字を書いている状況が発生してしまうので、改善を望みたい（3号館は照明調整ができています）。

アクティブラーニングを推進したくても、伝統的な教室空間では、机や椅子の移動などが大変である。ワークショップ（41番）もさらに整備していただきたい。昼休み（40番）に部活で使用していて、すぐに授業ができない問題もある。

コロナ禍によって、全体的な教育環境は相対的に悪化していると言える。以下に、個々の教員から提出された意見を挙げる。

- ・電子黒板や、プロジェクタ、現物投影のしやすいホワイトボードシステムなどの教具に慣れ親しんで、小中高と学んできた学生が増えてきていることを近年、特に感じている。昔ながらの黒板にチョークで板書すること自体、今までほとんど経験していなかったという学生もいる。本学（大学）よりも初等中等教育の学校現場の方が、環境整備がなされてきているため、特に、教員養成課程における ICT 環境等については、大学として計画的に改善する必要があるように感じる。

- ・オンラインに関してであるが、学習において「誰も取り残されない」ように、学内の Wi-fi 整備や、場合によっては貸し出しのルータ等、もしくは講習も用意されるとなお良いと思われる。一部の学生ではあるが、電磁波自体に抵抗感がある学生がいるかもしれない、と思われた時もあった（確証はないのですが、もしそうだとすれば、取り残されてしまう学生がいるということになり、とても気になっています）。

- ・自宅の Wi-Fi が不安定になることが多く、雑音も入りやすいため、大学の自分の研究室からオンライン講義を行うことが多かったのですが、研究室も付近の部屋からの雑音が入ることがありました。学生の中には雑音が気になる人もいたので気を使いました。今後もオンライン講義が継続される場合、雑音が遮断されるスタジオや研究室環境の整備を行い使い勝手もよくすることが望まれます。

5. 授業評価に関する感想、要望

授業評価が実質的な大学の教育力向上に結びついているのかどうか、その状況が見えないという意見は従来からあったが、肯定的な捉えも多いことも事実である。以下に代表的な意見をランダムに記す。

- ・毎回感じることであるが、この評価は教員個々の授業改善には役立っていると感じる一方で、

大学全体のカリキュラム改善にどのように反映されているのかが見えにくい感がある。

- ・人数が多い全面オンライン授業では今年度の授業評価形式は有効でしたが、ハイブリッドで行っていた他の授業では、授業の事前準備や出欠確認などに時間を取られるため、授業時間内で授業評価の時間をとることはできませんでした。

- ・授業評価（「授業に関する調査」）自体は、これで良いと思われる。ペーパーレス化は大賛成である。一方、授業評価以外にも、本授業独自にワークシートの一箇所に学生の授業に対する感想・意見・要望を書いてもらうことを行っており、今後も学生の声への配慮を怠らないように意識したい。とはいえ、見えない要望・届きにくい声があることも想定される。そのような声をどのように把握するかが、今後の課題である。また、すでにご検討なさっていることと思われるが、授業報告書もペーパーレス化（印刷しない）を推進しても問題はないと考える。

- ・授業時間中に、学生に授業評価をしてもらう時間を十分に確保できなかったため、回収率が63%と低かったことが反省点である。しかし、自由記述欄など、丁寧に学生からのフィードバックがあり、大変参考になった。

- ・授業評価は多角的・多面的な観点から実施されるのであれば、過度な負担にならない限り、有効だと思われる。ただし、基本は自己評価であるのが望ましい。

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

心理学科では、基礎課程の1年次生に対して平成21(2009)年度より毎年「心理学入門」を開講し、学科の全専任教員によるオムニバス形式の講義によって初学者に学問領域の魅力を伝える努力を続けてきている。例年、300名前後の受講者を集めており、学科専攻決定においても希望者が学科の定員を上回る状況が続いていることから、導入教育として成果を上げていると考えられる。

一方、2年次以上の専攻課程では、まず2年次前期に「心理学実験演習1」、「基礎情報処理技法」、「心理統計法I」を必修科目として設置し、科学的な思考能力(心の科学リテラシー)とパソコン技能の基礎の習得を目指している。このうち、「心理学実験演習1」では半期の間に7種目のレポートを課すことにより、科学論文の書き方(テクニカル・ライティング)の基礎的学力の習得に努めている(意欲のある学生には、学力をさらに向上させる機会として、2年次後期以降に「心理学実験演習2」、「心理学実験演習3」を選択科目として設置している)。上記の3科目の他、学科の必修科目には講義形式の「心理学概論」(主に2年次に修得)、さらには3年次・4年次の演習(各教員によるゼミ)があり、積み上げ方式で履修するルールを設けている。これらと並行して、認知・発達・臨床の各領域の特講や、各種のトピックスや方法論に関する講義や演習を選択科目として開講しており、徐々に専門性を深めながら、4年次の卒業論文執筆へと移行していくことのできるカリキュラム構成となっている。例年、卒業を予定している4年次生のほぼ全員が卒業論文を提出しており、提出した学生の全員が合格水準に達していることから、一連のカリキュラムが有機的に機能し、専門教育として成果を上げていることが窺われる。

2. 目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など

(他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください)

オンラインであっても対面であっても、一方向的に話すだけの講義では退屈を感じる学生も多いので、学生の積極的な参加を促す必要がある。リアルタイムでのオンライン授業などでは、例えば、Google フォームを活用して、チャットで簡単なクイズに回答を求め、即時にフィードバックするなどの工夫も考えられる。また、オンデマンド型のオンラインでは、クラス全体の課題への反応を次の授業でフィードバックすると、「他の受講生の考えなども聞けて良かった」、「自分の書いた回答に、先生がコメントしてくれて参考になった」などの肯定的な反応も見られた。とりわけ、受講生の反応が確認できにくいオンライン授業では、さまざまな形でフィードバックが求められる。

3. 今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

現行の体制で、導入教育・専門教育が有機的に機能しており、意欲のある1年次生が本学科を選び、進学後に学科のカリキュラムに熱心に取り組む状況が続いているので、水準を落とすことなく、これを維持し、発展させていく努力が必要である。

なお、学科所属の在学生に関しては、本学科で一定数の必要科目を履修して卒業した後、

本学の大学院に進学することにより、公認心理師の国家資格取得へとつながる体制が整っている。

4. 学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

学科の複数の教員から、「オンライン授業の活用が十分に出来ていないので、何らかの講習会の実施や、オンライン授業専門の職員の配置が必要だと思われる。」との意見が寄せられている。また、ハイブリッドの授業実施時には、TAなどを配置して、より効果的な授業ができるような体制を整えていただきたい。

5. 授業評価に関する感想、要望

とくになし。

第4章 聖心女子大学グッドティーチャー賞の推薦

「聖心女子大学グッドティーチャー賞に関する内規」に基づき、グッドティーチャー賞を推薦することになっているが、2021年度はコロナ禍のため、オンライン授業と対面授業、さらにはハイブリッド授業などが併用され、教員の教育力を公平に評価することが難しい状況であった。そこで、2020年度に引き続き、本年度はグッドティーチャー賞の推薦を休止することとした。

2021年度 授業報告書(回答フォーム)

本報告は本年度のご自身の授業を振り返っていただくと同時に、個々の先生方のご経験やご意見を、全学的に役立てるための資料として使わせていただきたいと思います。学生の授業評価の集計結果とともに、整理して掲載させていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

所属学科・専攻	氏名(職名)				
授業科目名	履修登録学生		名		
授業形式	1ゼミ・演習 <input type="checkbox"/>	2講義 <input type="checkbox"/>	3その他 <input type="checkbox"/> ()		
開講時期	1前期 <input type="checkbox"/>	2後期 <input type="checkbox"/>	3通年 <input type="checkbox"/>	4集中 <input type="checkbox"/>	
所属学科	1英文 <input type="checkbox"/>	2日文 <input type="checkbox"/>	3史学 <input type="checkbox"/>	4人関 <input type="checkbox"/>	5国際 <input type="checkbox"/>
	6哲学 <input type="checkbox"/>	7教育 <input type="checkbox"/>	8心理 <input type="checkbox"/>		

Q1. 本授業では目標をどの程度達成できたと思いますか。

- 1 達成できた 2 ある程度達成できた 3 あまり達成できなかった 4 達成できなかった

Q2. 目標を達成する上で効果的だった方法や工夫はどのようなものですか。(複数回答可)

- 1 パワーポイント 2 レジユメなどの配付資料 3 文献などの資料・史料
- 4 教科書・問題集などの教材 5 視聴覚教材 6 プレゼンテーション 7 ロールプレイング
- 8 グループディスカッション 9 ディベート 10 グループワーク 11 ゲストスピーカーの招聘
- 12 ICT ツールの活用 13 学内システム(Sophie、Google ドライブ等)
- 14 教室(座席の変更ができる教室・演習室など) 15 予復習の課題 16 授業内での課題
- 17 私語への注意、対応 18 小テスト 19 厳格な出欠席 20 授業の時間帯
- 21 シラバスの工夫 22 その他 () 23 特になし

Q3. 教室設備(空調・ICT 機器・マイクなど)に問題はありましたか。(教室番号 _____)

- 1 特に問題はなかった 2 問題があった ()

Q4. 授業内容、運用、カリキュラム編成などについて、特にご意見、ご提言がありましたら自由に記述してください。

- ① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について(ご自身のことでなくても結構です)
- ② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的と思われる授業方法や工夫について
- ③ 学科や大学全体として取り組むべきこと
- ④ 授業評価についての意見、提言など
- ⑤ その他

2022（令和4）年8月31日
聖心女子大学